
ふゆそら

沙堂 瑠々亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふゆそら

【Nコード】

N4710B

【作者名】

沙堂 瑠々亞

【あらすじ】

穏やかな視線を送るひとが居る。ある日私は、どうしてそんな目で見るの、と聞いてみた。彼は目の周りの筋肉を少し緩ませて、質問を質問で返してくる——しあわせてなんだと思いますか、と。／冬。白垂。空。鏤められた銀色の雪を溶かすように。／切な系。ほのぼのから、SF、ファンタジー、残酷表現・ナンセンスまで、異なるテイストを書く『冬』オムニバス集。

ふゆそら

雪色の土地は、冷えていてもどこかぬくもりを感じた。

カーテンを開けて、差し込んできた眩しい光に目を細める。

途端、眼下にあらわれたのは、一面白い景色と、靄の中にと錯覚してしまいそうな、曇り空。

「うわあ……」

うつらうつらしていた頭もどこかへすっ飛んでしまった。

二重窓から見下ろす、一面の銀色。向こうに見える畑も、きしや厩舎も、入り口付近に見える『ふゆファーム』の看板だってなんだって、朝露つゆに光って、きらきら輝いている。

昨日は夜に着いたから、暗くて雪景色が見られなかったのだ。鳥の声で目が冴えてよかった。朝じゃないと、こんな景色は見られない。

……うん、そうなんだ。今年もやっぱり、こゝ此処に来たんだ。

嬉しくなった私は、外の冷氣に触れてみたくて、窓を開ける。

赴由ふゆ 藤次郎代表 農場、『ふゆファーム』。

雪の土地で 私の祖父が経営する個人農場の名前だ。「自然であること」をテーマに、野菜や果物や豆を出荷している。頑固一徹が作る冬貯蓄型の有機栽培、の名が定着して、今では有名な料亭さんが直に仕入れてくれるまでになった。

この地では珍しい小規模敷地なんだけど（それでも大きいことには変わりない）、祖父はこれ以上畑を広げるつもりがないらしい。大規模で栽培すると質が落ちるとかなんとかで、有名チェーンレストランの直契約も頑なに断り続けているって話。

でも、なんとなくわかる。祖父は この農場を、できるかぎり自分の手で護っていききたいのだろう。

この銀世界に包まれた土地を見れば、いとおしくなるのも当然だ。でなければ私も、冬休みを狙って毎年ここに来ようとなんかしな

い。

夏じゃなく、雪が降っているこの季節だからこそ行くのだ。
冬に來れば、本来の雪の土地を感じ取ることができる気がするから。

何より、こんな銀世界を見ることの出来る この農場が私も好きだから。

「……あれ」

二枚目の窓を開けて、自宅と違う冷気を肌で感じていたとき。

私は、白い銀世界をさくさくと歩く誰かの姿を見かけた。

黒のダウンジャケットをフードまで被り、全身黒ずくめになって浮いたあやしい人物。

「おい。いつきくん」

手を振ってまで呼びかけたのに、黒フード君が気付いてくれる様子は全くなかった。

『ふゆファーム』の看板を横切って此方に向かってきてくれると思ったら、歩くスピードを変えるところか、畑を目指してるっぽい……

「いつきくんてばーっ」

大声張り上げてるのに、なんで無視されちゃってるの。

「いつきくん…… ……ああもう ハクサイ！ こっちに気付かせー！」

だんだん腹が立ってきて、ぐいっとな窓枠に身を乗り出した。

すると——耳から何かを引っこ抜いた誰かが、素早く左右を見回した。先端にボアがついたフードをばさりと外したかと思うと、声の在り処を正確に捉えてくる。

つまり、怒鳴り散らしたばかりの私の大きな口を見上げていた。
仏頂面と思い切り目が合った。反応速度の速さに、固まったのは私のほうだ。

いや、気付いて言ったのはこっただけど……さっきまで無視同然だったのに、なんでこんなすぐに。

「…あ。ザイマース、お嬢さん」

此方のそんな驚いた顔を見ても まったく気にせず、彼は飄々《ひょうひょう》と朝の挨拶をしてきた。

——いつきくんは、そんな人だった。

ふゆそら

「シャツフル買ったんだね、いつきくん……」

ストーブがやかんを乗せたまま、シュンシュンと懐かしい音を出している。

そんな昔ながらの灯油ストーブがあるリビングで、朝ごはんを食べつつ、私はひとり納得していた。

でもいつきくんからの返事はない。何をするでもなく、部屋の暖に当たっている。

いや、何かはちゃんとしていた。彼のツナギ服から伸びているのはイヤホンだ。携帯音楽プレーヤーを聞きつつ彼は暖房器具の前に居る。…だからさつき外を歩いていたときも、私の呼びかけに遅れたというわけだ。

「紗和ちゃん、豆ご飯どうだった。甘めにしてみたんだけど」

キッチンに居たおばさんが、にこにこしながら聞いてきた。ストーブのやかんを下ろして、私の分といつきくんの分のお茶を注いでくれる。食後の一杯をもらった私は、もちろんとばかりに即答した。

「うん、とっても美味しかった。枝豆大豆入ってたよね」

「そうなのよ。ペンションにも出してるんだけど、気に入ってもらえてうれしいわ」

篤子^{あつこ}おばさんは私の父の妹で、『ふゆファーム』併設のペンションを経営している。厨房も担当していて、料理の腕がいいと評判だ。そんなおばさんのご飯を独り占めできている私は、しあわせ者か

もしれない。

というのも、この時期にペンションはクローズしている。お休みしているペンションに、私は孫と姪のよしみで プチ留学させてもらえているというわけなのだ。

「いつきくんは向こうでご飯食べてきたのよね」

小回りよく動くおばさんは、ぼうつとストーブの火を眺^{なが}めているいつきくんにも声を掛けた。

「おじいちゃんはまだ起きて畑に行ったのかしら。お昼はみんなで食べましようって伝えてくれる？」

でもいつきくんは相変わらずシャッフルに夢中（？）で、おばさんの呼びかけに無言だ。

……そういやいつきくんでは、どうして家に上がってきたんだろう。

確か畑に行こうとしてなかったっけ。私が下に降りてきたらリビングに居たんだよな。私のご飯食べてる間ずつとぼうつとしたままだったんだよな。

ああ、いつきくんではおばさんに返事もしないどころか見ようともしないよ。

さつきみたいにあの呼び名にしないと、反応しないんじゃないかなあ……。

などとはらはらしていたとき。

「――紗和ちゃん、畑のおじいちゃんに挨拶^{あいさつ}してくる？」

私に呼び声がかかったので、慌ててしまった。

「えっ、あつ、うん。昨夜^{ゆうべ}は会えなかったしっ」

「なら良かった。いつきくんに案内してもらってね。おじいちゃんも喜ぶわ」

微笑みながら、おばさんは空の食器を下げる。キッチンに向かう際、視線を移して言った。

「いつきくん。紗和ちゃん待っていてくれてありがとうね」

「……うす」

え。もしかして。

私を案内するために、上がって待っていてくれてたんだろ。そんな考えが頭を過ぎったけれど、むっくり起き上がって、すたすた歩く彼を見たら、ううん違うよなと思わざるを得なかった。いつきくんの思考回路は、ちよつと謎。

——ペンションの玄関を開ける。やっぱり雪の町に来たんだなって再確認した。

途端に冷気が押し寄せてきて、負けそうになってしまふ。

雪の町の女の子は気合が入ってるっていうけど、本当だ。

昨日の夜 駅前を見て分かった。この寒いのに、みんなスカート短いんだもん。色白いんだもん。

そんな気合は農場では必要ないので、私はジーンズにスニーカーにセーターにダッフルコートに手袋、イヤーマフラーと、思い切り武装したけど。

女の子の歩幅を考えないいつきくんを追って、外へ出る。

「い、いつきくんは……向こうの寮に居るんだっけ、確か」

振り返ったいつきくんは、数秒黙った。フードは外してるし、シヤッフルのイヤホンはないから、今は耳に届いてたはずだ。……たぶん。

「エエ。俺は住み込みで働いてる社員ですけど、お嬢さん」

「……あの、そこまで律儀な返答を望んでいたんじゃないかって……。ていうか、その呼び名、なんとかしてくれない？ 私お嬢さんって柄じゃないし、いつきくんと同い年だし」

「俺は18です」

「『俺は』って、そんな お前とは違うみたいって言われても……あの、私これでも一応3月で18になるし」

「ひとつ違うじゃないですか」

「学校だと一緒の学年になるのー！」

話がかみ合っていないような気がする。昔からいつきくんはこうなのだ。ちよつと垂れ気味の目で、顔が女の人みたいに細い割りに、

独特のテンポを持つというか、達観しているというか、浮世離れしているというか。

「……いいんです」

ゆったりした伸びで、いつきくんが切り返した。

いいんです？ 何がだろう。

「あなたはこのファーム代表のお孫さんですしね。立派な令嬢です」
微笑まれた、と思ったのは気のせいだろうか。

自論で片付けて、彼はまた前を向いた。

数年前からその態度は変わらない。仏頂面^{ぶつちやうめん}で、飄々^{ひょうひょう}《ひょうひょう》
う》としていて、敬語を使うくせに横柄で。

私がいつきくと初めて会ったのは、中学を卒業する前の冬休み。春から働く奴だ、って祖父に紹介されたのが始まりだ。なんで農場で働こうと思ったの？って聞いたら、「俺は野菜作るほうが好きなんです」という平坦な返事をもらった。

あっけらかんとしすぎて、祖父の代弁がなかったら「ほんと？」と聞き返していただろう。

祖父の代弁いわく、「野菜は手間を掛けるほどきちんと成長して美味しくなってくれる。厳しいことをしても一人前になってくれるから好きなんだとよ」とのこと。一人前になったところで食べられないしもう運命だね、なんてことは口が裂けても言えない。好きな野菜作るために学校は通信制で充分と言ってるのは、果たして夢を貫くからいいことなのか、もったいないことなのか。

「その情熱を、いっちょ惚^ほれた腫^はれた話に発展させればいいの
によお」……とも、私の祖父は付け足していた。

まあ、生き甲斐^{がい}とか天職^{てんしき}ってのは、誰にでも等しくあるわけで。他人がどうこう言えるものでもないってのは、祖父も私も分かってるつもりなのだ。

右にはさつき私たちが居たペンションが見える。左には、雪にくつもの足跡がある馬場があった。

「紗和ちゃんも夏に来て、ホーストレーニングしてみない？ い

つきくん教え方うまいのよ。レッスンしてもらうといいわ」なんておばさんが言っていたのを思い出した。『ふゆファーム』には乗馬施設も併設していて、乗馬もできるらしい。

乗馬指導しているいつきくんなんて想像できない。ツナギを着てダウンジャケットを羽織ってて、軍手をして……野菜を手入れしている姿のほうが、私にとっては見慣れているのだ。

「……ほんと、名前まで野菜だもんねえ。ハクサイくん」

除雪された道を歩きながら、ふふと笑ってしまう。

すると。前を歩いていたはずの彼が、ゆらあり、と身体を反転させた。

「……いいかげん俺の名前音読みで呼ばないで下さい。カシワ イツキ。柏かしわ 斎いづきです」

しつかり聞かれていた。

どうやら今のは私の独り言に換算してくれなかったらしい。

野菜が好きなのに、自分が野菜っぽい名前と呼ばれると怒るというのは、これいかに。

「ごめんごめん」

手のひらをひらひらさせて、相手に降参ポーズを見せる。

慌ててなだめないと、後々言われてしまいそうだ。

「でもいつきくんだって私のこと変な風に呼ぶじゃない。おあいこだよ」

「……」

だが彼は此方を見下ろすだけだった。まだ釈然しやくぜんとしていないのだろうか。若干生気が消えかかっている目で凝視されているというのは、気が張った。眠そうな目なのに、なんでこんな威圧あるんだろう。

「……お嬢さんは、いいんです」

私が呼びかけるより早く、彼は伏し目がちにそれだけ答えた。

予想もしない言葉に、気が抜けたのは此方だった。

考えもしなかった彼の表情に、面食らってしまった、という

方が正しい。

いつきくんは意外にまつげの多いその目を瞬かせ、遠慮がちに視線をはずす。

半分だけ口元を緩めて、笑いかけられると思ったのに。

結局は、私を見ようとしなかった。

「ねえ。いつきくんはどうして……」

……どうして、いつも笑いかけるのをやめるの。

言いたかったのに、どきりとしてしまったせいで、俯いたまま、別の質問を口に出していた。

いつだっけそうだ。いつきくんは、笑いかけてくれたことなんて一度もない。

さっきも。笑ってくれようとしてたじゃない。

なのに、どうして……そんな風に、視線をそらすの。

「なんで、私はいいか……言っの」

「ねえお嬢さん」

顔を上げる。いつきくんはもう前を向いていた。

「……もし別世界の、別の時代の、別次元で、別の歳の自分がいたらどう思いますか？」

黒いダウンジャケットがゆっくりと歩き出す。

区切ってゆっくり問いかけてくれたのに、その意味が解らなかった。するといつきくんはまた質問してくる。

「どうして俺がお嬢さんって呼ぶのか、分かります？」

「……『代表の孫だから』？」

最初に令嬢だなんだと答えたのはいつきくんだ。

それを聞くと、彼は首を斜め後ろに動かして、いつもと大して変わらない眠たそうな目で私を見てきた。

「……じゃあいんです。それで」

無感動に。あっけらかんと、それだけ。

「思い出さないでくれたほうが——笑ってくれていたほうが、しあわせってことですよ」

相手はさくさくと歩き出す。この道の向こうにある、雪一面の畑を指して。

きっとそこでは祖父が作業をしているはずだ。雪の中から、秋に収穫して貯蔵しておいた野菜を取り出している。小さなこの農場で、頑なに方針を護りながら、一途に、作り続けている。

質問を振られてそのままになってしまった私は、話が追いつかずわけがわからない。

けれど思い直した――祖父にこの謎の人物の代弁をしてもらえばいいのかもしれない、と。

私が来たのは、まだ昨日だ。冬休みはまだあるし、この土地にいるのもまだまだ先なのだ。

いる間に聞き出せばいい。どうしてそんなことを言うのか、本当に話したかったのはなんなのか。

そうと決まれば。

小走りになつて、彼を追いかけた。黒いダウンジャケットを、後ろからくいと引っ張ってやる。

思いがけない引力だったのか、相手が振り返る。鳩が豆鉄砲を食らったような顔になったのがおかしかった。

「……いつか教えてね。どうしてお嬢さんって呼ぶのか」

宣言みたいに言つと、やっぱりいつきくんは私から目を逸らした。まるで この土地をぼやかしていくゆきいろのように、曖昧な表情を浮かべて。

ふゆそら（後書き）

■「ふゆそら」について

テーマ：「冬」

各話題名予定

・ふゆそら

都会育ちの少女と、雪の土地の農場で働く少年。

・君知るや溶ける白華 1～6

館の一人娘と、館に仕える少年。（15歳以上推奨）／村に住む少年と、家に引き取られた少女。

・矮星の静寂 1～

軍の象徴の女と、護衛の青年。（グロテスク描写有り）

・ユキソラ

都会育ちの少女と、雪の土地の農場で働く少年のその後。

・崖下の王 1～
がいか

薦を操ることができる村長の娘と、巨大遺跡を目覚めさせてしまった異世界の少年。

・“Alice that returned” 1～

『鏡の国のアリス』をモチーフ。『赫の王様』の本体を探す『アリス』。

・cauchemar de neige

■恋愛要素を含むファンタジーとして投稿しています。

二話目以降、180度変わった趣向になりますので、読む際はお気をつけください。

……と一応注意書きを。

裏テーマやら目論見（笑）やらあるので、今回は「後書き」で色

々語ろうと思っています。

思ったより長丁場になりそうなのですが、宜しければお付き合いください。

君知るや溶ける白華 1 (前書き)

【今はただ思ひ絶えなむとばかりを人づてならで言ふよしもがな】

君知るや溶ける白華 1

「冗談、でしょう」

息まで凍り付いてしまいそうな、冷え切った夜だった。

雪が止んで、昏黒の空に浮かぶのは半月。部屋に燈ったのは、弱い月明かり。

孝子^{たかこ}は寝台の上に組み伏せられている。手首を確りと押さえ付けられ、結わきを解かれ、白い敷布^{シーツ}の四方に黒髪を投げ出している。

——今、自分を見下ろしているのは、誰なのか。

嘘だ、と孝子は頭^{かぶり}を振った。信じたく無かった。だが、部屋に押し入って来た相手は、態^{わざ}と孝子の前に顔を突き出した。相手の髪の毛が、自分の鼻にぱらぱらと流れて当たる。月明かりが、暗闇の中で蠢く顔を明確に照らし出す。

「冗談ではありませんよ、お嬢様。俺はあなたが嫌いでした」

皮肉めいた口調が、暗くて寒々しい室内に響いた。
獣^{けだもの}にしては低く、闇^{くら}く、憎悪を向ける——声だった。

「あなたさえ居なくなれば、俺は自由なのだから」

君知るや溶ける白華

あれは、孝子が数えて十に生った時の頃だ。

萌える季節の午後だった。洋装で出て来る様に云われた孝子は、女中に着替えさせられ部屋を出た。

屋敷の広間^{ホール}で待つて居たのは、父と父の執事と、同じ年位の見知らぬ少年。

「孝子。今日から山江の息子が、片桐家に奉仕見習いとして出入りする。彼に挨拶なさい」

父の云う通りに、洋服の裾を広げてお辞儀した。一つ下だという少年は、ずっと孝子を見詰めていた。

……何て透き通った目をした子なんだろう。

胸が高鳴るのを感じた。見惚れて其の次が告げられない孝子に、少年は、憂いを湛え微笑んだ。

「山江^{やまえ} 嘉成です。よろしく」

片桐家に奉仕するなり、少年は、序所に其の頭角を顕して行った。彼の立ち居振る舞いに、屋敷の者は目を見張った。山江が孝子の父の敏腕な執事だった様に、少年もまた、右腕に為る様な力を宿していたのだろう。

父は孝子に是う云った。山江の息子は、彼れと同様に腕が立つ。必ずお前の役に立つだろう。だからいつでも傍に置き、共に学び、お前が指示をしてやりなさい。

然うして、孝子の隣にはいつも山江の息子が居るようになった。

父の言付が有る事は勿論だったが、何よりも孝子自身が、望んで少年を連れていた。

少年は屋敷の中では良き奉仕見習いであつた。裏山へ行く時は孝子の警護役であり、お目付け役だった。庭で居る時は孝子の遊び相手であり、話し相手でもあつた。二人で居る時は、敬語を使わずに話して呉れた。我が俣を云えば、諭して呉れた。其れが孝子には嬉しかった。

……考えて。考えて、孝子。

溜まつた涙を、舌でじつくりと舐め取られる。甚振られる様な其の過程に耐えながら、孝子は思考を巡らせていた。

相手の様子が奇怪しくなったのはいつか。

外の出掛けに応じなくなったのはいつ頃からか。

二人でも敬語を使うようになったのはいつか。

^{へりくだ}遜るまでの言葉を使うようになったのはいつか。

執事らしくなっていく少年に、自分が距離を感じる様になったのは、いつなのか。

「あなたと会ったのは、俺が数えて九つ、あなたが十の時でしたね」
思い出を語る口調だったが、少年の行動には落差が有った。臉から頬、首筋に渡って、粟立つ肌を舌で辿っていくという行為は、屋敷の一人娘を貶める以外の何物でも無かった。

「七年です」

カリ、と小さな音がした。少年が、口で孝子の襟元の釦ボタンを外しに掛かっていた。

一つ目を外し終えると、少年は顔を引き上げる。孝子の茫然自失としている姿を見遣り、満足げに笑った。

「俺はこの家に来てから、あなたの嗜好と思考を徹底的に覚えさせられました。何を考えているか。次に如何したいか。如何されたいか。……自分の意思とは無関係に、七年間も」

薄闇に浮かぶ少年の目が、孝子の身体を降下する。開いた襟元から覗く、喉元。次に鎖骨。華奢な身体の線。襟元に視線が戻ったかと思うと、少年は孝子の服の襟を口で啞えた。奥歯を使って噛み直し、其の儘象牙色の布地を勢い良く引き裂いた。

「俺がこの家に来た本当の理由——教えてあげましょうか？」

釦が弾け飛ぶ。白い網目刺繍レースが綻ぶ。洋物の懐古服アンティークとして、父が茶話会用にと設えて呉れた物だった。肩と胸元を晒された格好になり、孝子は短く呻いた。

「やッ……」

かたかたと歯が鳴った。少年に四肢の自由を奪われ、発した自分の声は余りにも無力だった。

「あなたはずっと俺を信頼してきたんでしょう？ 如何思われていたか知らないで、俺に笑い掛けてきたんでしょう？」

理性の無い獣けだものが、こんな含み笑いを見せるものか。

口元を柔らかく曲げて、翳りを帯びた目で、侮蔑を表す表情を向けて来るものか。

孝子は未だ信じている——こんな含み笑いを、嘉成がする筈、無い。そんな欺瞞に満ちた目を、私に向ける筈が無い。これは夢だ。

日没前に疲れて寝てしまったのが不可ない。だって嘉成は、今日の茶話会を屋敷の人間と一緒に援けて呉れた。誕生日おめでとう御座いますと云って呉れた。お父様だってお母様だって、是れで孝子も縁談を探せるようになるって――

「俺はね、孝子お嬢様」

上から抑えつけられていた両手首の圧迫が、更に強くなる。

「お嬢様と笑顔で話している裏で、『是れ』は如何な風に扱えば俺に媚びねだる様になるだろう、そう思っていたんですよ」

有無を言わさない威圧があつた。理性を未だ残す其の寒々しい目を見るなり、体軀が震えた。四肢の自由を抑圧され、屈伏されている恐怖に。裏切られた事に対する深い絶望に。元凶の相手を身体に跨がせているという、脅威に。

「……………め……………」

止めて。止めて頂戴、ねえ嘉成！

震える声でそう懇願しても、ただ嗚咽が漏れ、目に涙が溢れるだけだった。

願いは聞き入れられなかった。少年は冷えた目で見下ろすと、乱れた服の裾を目繰上げた。喰われる寸前の草食獣が、覚悟出来ぬまま肉食獣の牙に掛けられる様に、孝子は少年の行為に蒼褪めるしか無かった。

少年が孝子の片脚を押し遣った。宛ら、猛獣が相手の意思を問わぬ儘、捕食対象の喉元に牙を突き刺す様に。開かせ、固定し、全体重を掛けて孝子の動きを封じた。

其の途端、孝子は身体を仰け反らせ、声に生らない悲鳴を上げた。塞がっていた扉を、何の準備も無しに抉じ開けられたのが分かった。

割り込まれる。捻じ伏せられる。潰される。掻き回される。侵食される。

心が、引き千切られていく。

抵抗する力も疾うに失せた孝子に、少年は尚も囁いて突き落とし

た。

「止めることは許されません。……あなたの父上は、あなたの純潔より、手解きを覚えて良い家柄の男に嫁ぐことこそ重要と考えていらつしやる」

吐息混じりに聞いた言葉こそ、阻喪の孝子を追い詰めるには充分だった。其の内に孝子は、自分が何をして、如何な情況下に居るのが曖昧になった。涙で滲んだ目では何も見えない。血と汗と生臭さで利かなくなった鼻、ただ異物を押し込まれて鈍くなった感覚、五感の内の四感が急速に機能を失い、其処に誰が居るのかすらも曖昧にした。

聴こえて来るのは、跳ねて押し留まる水音。此方を貶めるだけの密やかな声。荒く、不規則な息遣い。声にも成らない、喉で鳴るだけの嗚咽。

「そのうちにあなたは、手練手管を身に付けることになるでしょう。その身体に男の毒を染み込ませるようになるでしょう。そうしてあなたは、どこぞの貴婦人だ」

生気の抜けた孝子に、少年は宣告した。

孝子は目を瞑って遮断しようとする。未だ聴こえる密やかな声。水音。荒い息遣い。

——いつだっただろう。家庭教師の目を盗んで、孝子はこっそり相手に耳打ちしたことがあった。

退屈な授業を放り投げて、外へ連れ出した。雪が綺麗に降り積もった次の日だった。

何処も彼処も真白くなっていた。未だ除雪されていなかった庭園は、靴跡をくつきりと残した。

生まれてから何度も見た景色だった。其れでも、抜け出してきた解放感で一杯に為って、銀色の世界を駆け出していた。荒い息遣いで、後ろを早くと促した。

相手を待っている間、雪を掬ってみた。手のひらに乗せた途端、結晶が体温に馴染み、じわりと肌を濡らした。握り締めると、液体

がぼたりと垂れて、雪の大地に流れていった。

ねえ嘉成。見て。こんな風に雪を手のひらに乗せると、溶けていくのよ。

振り返って見せて遣ると、少年は大人のように微笑み、頷いた。其の顔が——思い出の中で笑っていた相貌が、緩りと嘲笑に変わった。

进^{ぬめ}って滑る音が聴こえた。相手の体温が遠ざかる。麻痺した体躯が束の間の幻影を見せていたのか。目の間から液体がぼたりと垂れて、雪色の敷布に流れていった。

「その前にあなたはただ……俺の手に、弄られていればいい」
ねえ。嘉成。見ないで。

白く濁っていく意識の中で、孝子はただ彼に請うている。

……私をそんな、慰み物の様に見ないで。

君知るや溶ける白華 2

雪の広野は果て無く続き、全てを覆い隠してしまう程に真白かった。

先程まで降っていた雪は止んでいた。此の俣先に進めば吹雪に遭わず、城下町に行けるだろう。

カナンは手袋ミトンの上から雪を掬い取ると、握って潰さぬよう気を付けないがら空気中へ離してみた。僅かに出た風に、さらさらと流れていく。直に手で掬えば、指の間を通っていく雪の感触を確かめられたらだろうか。

そんな思いも頭を過ぎったが、今体温を下げる事は避けたかった。十回目の星の巡りの日は過ぎた。定められた掟は、速やかに遂行しなければ為らない。

カナンはすつくと立ち上がると、銀世界の中に居る誰何を探した。先程、自分の手から離れて、雪の広野に駆け出してしまった少女の事だ。

すうと息を吸い込む。怒鳴れ声色にならないよう気を付けながら、少女の名前を呼んだ。

「——イリス！」

栗色の髪の毛を帽子で覆った少女。はしばみ榛色の瞳と、微かに在る雀斑そばかすが愛らしい。

彼女はカナンの窘める声に気が付くと、名を呼ばれた仔犬の如く、緩やかな弧を描いて戻ってきた。

「ねえねえカナン！ 見て」

この地に生まれてから、幾度も見た景色の筈だ。其れでも、村を抜け出して来た解放感で一杯に為ったのか、一面の銀世界の上で跳ねていた。村一番のお転婆に育った三つ下の少女は、笑顔で手の平を広げて見せる。

「こんな風に雪を手のひらに乗せてるとね」

「……溶けていくんだろう」

カナンが溜め息を見せ付けてやると、少女は先手を打たれてきよ
とんとした。が、次の瞬間に、ぱあっと目を輝かせて同意する。

「そうなの。ひらひら落ちてきた雪がじわじわ水になるの！ ひん
やりして気持ちいいんだよね」

……この少女に厭味は通じないらしい。

雪が嬉しくて仕様が無い、と身体全体で表現する少女に向かって、
カナンは努めて冷静に諭そうとした。

「イリス。きみは凍傷になりたいのかい」
フロストヴァイト

「……凍傷？」

「ほら、直ぐ手拭タオルで水を取って。手袋ミントンを着けるんだ」

うん分かった、と素直な声が返ってきた。カナンに手渡された手
拭オルで、少女は手の平の水気を拭き取る。

革の手袋は家を出る時に手渡されたものだ。表地を牛の革で、裏
地を兎の毛並みで揃えた上等の品。親指の付け根の部分に押された
ラヴィット
カアウ
刻印。——他ならぬ、城の皇家だけが身に付ける事の出来る代物だ
った。

手袋ミントンを嵌めた両手を擦り合わせ、温かい息を吹き掛ける少女。
其の無邪気な仕種を見遣りながら、カナンは思い返していた。

「——いいかい。お前は、『あのお方』を城まで届ける義務がある。
あのお方はいずれ、この国の礎になる運命にある。そしてお前は、
あのお方をこの国の人柱として崇める定めにある。

でなければ、私たちが命を賭けて秘匿してきた意味がない。あ
のお方を 他の子どもたちと同じく育てて護そばつてきた意義がない。」

物心ついたときから、繰り返し家の姫ソヘに言われてきた言葉を。

『先読みフォアシイ』が出来るカナンの姫は、長年城で術者ソーサラーとして仕えてき
た。能力で先を探り、国の繁栄へのよりよい道を提示する役目だ。

呪術の能力が衰えてからは、退任し、城より遠く離れた村で家族と
暮らしていたのだが、ある勅命を賜ったのだと言う。

『人柱サクリファイス』の秘匿。それは、五百年に一度、万物に捧げる定めに生

まれた皇族の娘を、十の星の巡る日まで、匿って育ててほしいというものであった。

そしてカナンが数えて五つになる時、その少女はカナンの新しい家族としてやって来た。

まだ三つにも満たない彼女は、泣いてばかりいた。環境の違いに怯えていたのだろう。それでも、此処は危害を加えない場所であること、村の誰もが歓迎していること、新しい家族になりたいということ……村の人間が教えていくと、よく笑う様になった。

あれから——星は巡った。

怯えていた彼女は、自らを 何かの事情で預けられた子供だと悟った一方で、活発な少女に成長した。今では 村一番のお転婆娘として周囲の人間を梃子摺らせるようになったほどである。

「他の子どもたちと同じく育てて、護ってきた意義がない」——
嫗の言った事は確かだ。村の大人達が、少女を皇族の人間だと特別扱いしたことは無い。むしろ、他の子らと訳隔てなく叱り、褒め、育ててきた。カナンも同じく、少女を妹として叱り、褒め、護ってきた。こんな日がいつかやって来るとわかっていながらも。

「カナン、城下町にはあとどのくらいかかる？」
くいくいとカナンの服の裾を引っ張り、少女が無邪気に訊ねてきた。

『嫗の旧い友人に会って、手紙と品と渡して欲しい』、是れが少女を城下町まで連れて行く口実である。一度は城下町に行きたいと少女が言い出すのを加味していた。長い旅路を我慢できたら、帰りに城下町で上等の服を仕立ててもいい……その提案に、少女は喜んでカナンについてきた。

知らないのだろう。嫗の旧い友人とは、城の人間のこと。品とは、献身する少女そのもの。上等の服とは——彼女が身を清める際に着る最高級の絹シルクの服の事だと。

「おばあちゃんのお友達、きっと私たちのこと待ってるよね」

——待っている。五百年に一度、贖ってくれる『人柱』の存在を。

この少女を城に届けて、一帯はどうなるのか。城の人間に受け渡した後の事を、カナンは推し量った。

数日の間に通達が出て、城下町は元より、離れた土地の者までもが『人柱』の儀礼を知るだろう。

隠されていた末の皇女を知り、人々は新しい名前で皇国と皇女を讃えるだろう。

少女は、数ヶ月の間に身を清められ。呪術を施され。白い服に着飾り。呪術者たちの手によって。その胸目掛けて、剣を刺されて。

血は崇高なものとして振舞われ。肉は細切れに。名は永遠に。

以後の五百年間を安寧に過ごせる『ヴィクトイム礎』として、その名を城に刻み付けるだろう。

五百年。

その年月の為に、この少女は犠牲になるのか。

村の人間も、嫗も、その安寧の五百年の為に、少女を偽りの笑顔で育ててきたのか。

……ちがう。何を考えているんだ、僕は。

ふつと湧いた思考を、カナンは慌てて否定した。どんな思いで、嫗が自分たちを送り出したか。どんな思いで、城の人間を迎えを拒み、この役目を託してきたか。忘れてはならない事を思い出したからだ。

「私ね。おばあちゃんのお友達に、伝えたいことがあるの」

歩みを止めてしまったカナンを促そうとしたのか、少女が先を歩いた。踝まですっかり入ってしまう雪道を、とつとつと間隔を開けて、片足ずつ交互に跳びながら進んでいく。

「……そのお友達が、私をおばあちゃんに預けていったひとだったら、だけど」

はつと胸を突かれる。どう切り返していいものやら、カナンは迷った。「お友達」が自分の出生にまつわる人間だと薄々気付いていたのではあるまいか。行っても良いと言われた場所が、外れの村に住む十の娘が容易に行ける処ではないのだと感づいたのかも知れな

い。どちらにしろ、カナンには肯定も否定も出来ないのだ。答えは、そのどちらでもないのだから。

「話したいな。カナンやおばあちゃんや村のみんなと、楽しく過ごしてるって。そりゃあ、おばあちゃんみたいにくまなく縫いものは出来ないし、凝ったお料理はまだ修業中だけど……裏のおばさんに教わって、野菜作りの才能あるわって褒められたんだよ」

朗々と話す目の前の少女を追う事が出来なくなって、カナンは目を逸らしていた。彼女の目を見てしまえば、嘘が曝け出してしまう様な気がしたからだ。……否、カナンは嘘を吐いていない。少なくとも、彼女を前にして嘘を吐いた事など無い。騙して来たと、罵られるのが厭なだけだ。五百年の安寧の為に、偽りの笑顔で見て来たのかと、問い質されるのが怖いだけなのだ。

「村のどの男の子よりも数を覚えられるし、魚だって釣ってこられるし。カナンだって知ってるでしょ？ エリック先生が、私の作った人参と、釣った虹鱒で美味しい野草料理作ってくれたこと」

だが、そんなカナンの心中を他所に、少女は口を果敢に動かした。さく、さくと雪に入っては出てを繰り返して、先を綴る。広大に広がる雪の大地に、彼女が歩いた軌跡が残っていく。

「だから——」

少女の屈託ない話を聞きながら、カナンは空を見上げる。吐き出した自分の息が、白い煙になりながら空へ上っていく。

……灰色だ。

思わず左手で、首に掛けた六角水晶クリスタルを握り締めていた。

「離れてても、私のことは心配しないで、って——」

「——カナン。おまえに、言っておきたいことがある」

出発する前日の夜。少女にとっては暫しの別れる前の宵であり、嫗にとっては今生の別れとなる宵だった。少女が寝静まった後に、嫗はカナンの部屋を訪ねて来た。差し出されたのは、鎖に巻かれた

六角水晶クリスタルだった。

「わたしの『先読み』の能力ちからは、家族の誰にも受け継がれていないと伝えたね。……だが、おまえには、少しだけだが有るんだよ」

鎖に巻かれ、重心を真中に保つ透明な水晶が、嫗の手の下で揺れていた。カナンが受け取ると、しゃらん、と金属の擦れ合う音が、夜の部屋に響いた。

どうしてこれを？ 言いかけたカナンの問いを遮って、嫗が先に切り出した。

「この土地の向こうに、磁場テンソルが開く場所がある」

普段耳にしない単語だった。恐らくは呪術用語だろうか。家で『先読み』の能力ちからのことを一切話そうとしない嫗が、単語を話に持ち出したのは初めての事だった。

「わたしの読みによれば、これから何がしかの理由で場所の一部が歪む。うまく行けば、共時並行世界シンクロニシティへ繋がるかも知れない」

淡々と、嫗が話した。限られた知識を、最低限だけでも教える様に。

「もしお前が義務に抗ってでも、あのお方の未来を案ずるのであれば——」

其れは、嫗なりの秘めた決意だったのかも知れない。城での勅命を裏切つてでも、反故しても、国の安寧を引き換えにしても——少女の行く末を思った、言葉。

「何処までも逃げておゆき。……私たちを、村を、城を敵にしても、護つておゆき」

その時の嫗の切ない顔を、カナンは頭から切り離すことが出来ない。

「『イリス』を、頼んだよ。」

嫗が、少女を 家族の一員として呼んだ、其の夜の事を。

“これから何がしかの理由で場所の一部が歪む——”

「どうしたの？」

少女の一声で、意識が立ち返る。

握り締めていた六角水晶クリスタルは、体温に馴染まずまだ冷たかった。

姫の言葉を察するに、磁場の歪みでこの水晶が反応するということだろう。

六角水晶クリスタルには、姫の能力の残滓ちからが入って居る。何某かの理由で、力が引き出されるとしても——共時並行世界シンクロニシティへ繋がるとは如何云う意味だろう。逃げるとは……村を、城を、敵に回してでも彼女を護れとは、姫は何を提示している？

ずっと考えている。大義と、使命と、世界の安寧、秩序。一人の少女を礎にする事と、五百年の安寧の約束とは同義であるか否か。幼き頃より、自分に課せられてきた使命を、義務を全うしようとしていない自分の此の揺らぎは——赦される行為ことなのか。

「……イリス」

六角水晶を手から離しながら、カナンは其の名を呼んだ。城へ受け渡せば、生涯呼べなくなる 皇女の仮初の名前だった。

「なあに。カナン」

ずっと考えている。屈託無く返して呉れる この少女が居なくなる其の日を。自分で望む望まないに関わらず、『人柱』に成る為に少女が生まれてきた意味を。

「きみは……いま、しあわせ？」

カナンが問い掛けると、彼女はにこりと笑う。そして、如何にかふるふると首を横に振った。

「“しあわせはきっと かぜにみずに、 ながれるものすべてに みえないものすべてに にてるわ”」

詩の詠唱の様な言い方だった。呆氣に取られたカナンを置いて、少女は 彼方の森を指差しながら、元気良く駆け出していく。

「つまりはそういうことだって、おばあちゃんが言ってたの」

カナンの傍を離れて、白い景色の中を走っていく。

「だからね、きつと——あとでしあわせって思えるのが、しあわせ

ってことだよ！」

“ 幸せはきつと風に。 水に。 流れるもの全てに。 見えないもの全てに、よく似ている。”

見えないもの全てに。 ならば此れは雪の様なしあわせなのだろう、とカナンは皮肉った。

雪の様に空から現れ、形に残り。 捕まえた瞬間に手のひらの上で溶けてしまう様な、そんな 限りの有る幸せで在ると。

苦笑しつつ、カナンは再度 頭上に目を向けて見た。

白い花卉はもう降って来なかった。 代わり映えのしない灰色が、天蓋を覆っているだけだった。

そう、苛立ちをぶつけられる存在など——灰の空の何処にも居やしない。

君知るや溶ける白華 3

「教えて呉れないかしら」

凍った様に細い月が、真つ暗な闇に浮かぶ夜だった。

「あなたは……ずっと、私を貶めようとしていたの」

開け放たれた窓から、ひゆるりと冷気が押し寄せる。

窓に備え付けられた緞帳カーテンが、翻って音を立てる。

窓際に座る少女は、乱れた服装と髪のまま、寝台ベッドの上の嘉成かなりに訊いた。

哀れみも怒りも憐憫もなく、ただ淡々と、感情を内に潜める様に。

「今抜け出せば、気が付かれないで外に行けると思うの」

家庭教師チューターが指示を出して、部屋を出て行った後。窓の外をぼんやり見ていたと思っていた少女が、こっそりと耳打ちしてきた。

独逸語の書取を真面目にしていると思ったら、一頁も終わらずに是である。

口を開けば、出てくるのは勝気な言葉。道を歩けば、先導を歩いて振り返る。煩瑣回避サボタージユを悪びれずに提案するこの少女こそ、片桐家の一人娘であり、山江やまえ 嘉成が仕える相手となった主であった。

少女のお守り兼お目付け役兼、話し相手で幼馴染でもある少年は、さてこの提案を如何切り返し、勉強に勤しませようかと考えた。

「溶ける前に嘉成だつて見たいでしょう。雪」

如何にも気を利かせた姉ぶるが、外に出たいのは少女の本心である。

嘉成は暖炉の暖が隅々まで渡った部屋で、ちらりと西洋風の窓の外を覗き見た。

灰色の曇天の下には、誰の足跡も見当たらない銀色の裏庭。

午後には屋敷の者と庭師が除雪に入るだろう。数時間後には、一面の白色が茶色塗れになってしまふに違いない。

「……ね？」

少女はもう椅子から立ち上がって、此方に手を伸ばしていた。

この少女が時折見せる表情に、嘉成は不意打ちを喰らってしまう事が多々有る。

少女の姿と行動が相反しているから、余計にそう思ってしまうのかも知れないが――初めて挨拶した時から嘉成は感じていた。

目と鼻の造詣が明確に顕れているのに対し、少女の口元に浮かんでいるのは柔和な笑みなのである。不均等の美とも言えはいいのだろうか。嘉成には、いつか見た異邦の裸婦像が思い起こされるのだった。気高く、美しく、清らかで在る少女。いつでも彼女は、屋敷の小さき姫だった。

しょうがない、と嘉成は肩をすくめた。面倒事にも、屋敷の人間を論破する弁論術にも、もう慣れた。

差し出された手に自分の手のひらを乗せた。

少女が握る。手の甲を引っ張られ、屋敷の中を駆け出して行く。温かいぬくもりが在った。

――此処を抜け出せたらどんなに良いだろう。夜が来る前に、彼女と一緒に。

だが、其の手の温もりが、却って己の被虐心を深く抉り、痛みを増幅せしめているとは知らなかった。

昼は少女の傍に居させ、思考を覚えさせる。

夜は少女から離し、女中に依って少女の嗜好を叩き込む。

其れは嘉成が一人娘の『付き人』として生り得るに、避けて通れない試練だった。

嘉成は夜が来る度に震えていた。女中達が代わる代わる遣って来て、嘉成の自由を利かなくさせるのだ。

心の内で厭だ止めたい痛い気持ち悪いと思つていても、身体は悉く嘉成を裏切つた。

女中達の嗅がせる香に反応し、一挙一動を抑制され、自分のとは思えない声を出した。

そうして屋敷で数年の試練を受ける内に、嘉成は服従から支配に立場を逆転させる術を覚えていた。

こうすれば嫌が応にも反応し、歡喜に震え、大人しくなり、全てを委ねる様に為る。

手練手管と抗う術を知つてしまえば、今迄精神で感じていた不快が、嘘の様に晴れた。

温かい身体が、酷く生温い肉の塊に思えた。

蕩ける蜜の音が、狂った猫の鳴き声に聴こえた。

涎を見つとも無く垂らして、乞うて来る生き物が、彼には酷く浅ましい物に感じた。

相手の目を塞いでしまえばいい。手足を自由にさせて、仰け反らせてしまえばいい。

然し、嘉成は気付いたのだ——自分が、特定の匂いと、特定の声にしか反応しなくなつた事に。

自分が見て良いと思う物、善しと感じる物が、誰かと似通つている事に。

彼は少女の全てを覚え込まされていた。やがて少女に教え込む自分の使命も刷り込まされていた。

覆そうとして、抗おうとして、術を覚え、優越感を抱いたのは過信だった。

インプリンティング
刻印付されていたのは——紛れもなく自分で有つたのだ。

「礼を言つわ、山江 嘉成。あなたの力添えがあつたから、皆を楽しませることが出来たのよ」

知らないのだろう。この少女は、親が如何な事をして上に伸し上

がつて来たかを。

右腕の使用人の息子を、一人娘を懐柔の道具にして、如何な計算と策略を立てているかを。

今——其の使用人の息子が、何を考えているのかを。

其れであるから、茶話会が終わった夜半過ぎに、嘉成の部屋に遣つて来たのだ。

疲れているのに訪ねて御免なさい、直ぐ帰るから、一人娘はそう前置きした。

屋敷内とは言え、嘉成が少女に仕える側に在るとは言え——傍から見れば、年頃の娘が同伴者も無しに若い男の部屋に出向く図である。目撃された場合、誰の責になってしまふかという内情を、分かつての事だつたのだらう。

「あなたは立場を考えて接してくれているのだと思うけれど……時々なら、昔のように話してもいいかしら」

堅苦しい迄の敬語で話して、遠避けていた筈だつた。其れなのに少女は笑う。微笑んで見せる。嘉成が、立場上から彼女を突き放したと考えている。

本当は、裏表など無いであろう片桐家の一人娘を見る度、心の何処かが軋んでいくのを感じたからだ。

得体の知れない物を抱え、曝け出してしまひそうだったからだ。

彼女が通る度に、彼女と形式通りの言葉を交わす度に、嘉成は頭の中で片桐の一人娘を蹂躪し、喰らい、屈服させていた。幾度も少女が乞う姿を夢想した。少女の姿を消そうとして、嘉成は夢の中で少女を穢していた。七年の間に植え付けられた感情は、確実に嘉成を侵食していた。

廊下に明かりが燈っている。ゆらりゆらりと揺らめき、少女のレス生地を暖色に染めている。

少女の問いに答えた嘉成は、そのままぐいと髪を掴み、顎を近づ

けて呼吸を塞いだ。

夢想の出来事と同じく、言葉で脅し。刻印付されたことと同じく、丁寧^{ていねい}に剥ぎ取り、舐め取っていき。

四肢の自由を奪い、一方的に虐げた。

——嗚呼、解った。

狂おしい程の是れは、この感情の名は……

「憎悪ですよ」

肌を凍傷^{やけど}くような冷氣が、二人の髪を揺らした。

努めて冷静に訊く少女に、嘉成は対峙する様に笑って答えた。

「俺は刻印^{すじこみ}付を克服出来たと思った。……けれど間違^{まちが}いだった。あ

なたが居る限り、俺は呪縛から逃れられない」

細く為った月の僅かな光が、部屋に入る。反して、窓際の少女の瞳は、何の光も燈していなかった。

「だから、あなたを追い詰めて、貶めて、自分が自由になりたかったんです」

酷く冷えている。部屋も。外も。この様子を第三者の如く冷静に見続けている、嘉成の心も。

「そう」

そして少女は、嘉成の言葉を聞くなり、虹彩を燈さない其の瞳を閉じた。

「だったら今、私が嘉成を放ってあげる」

過去に勉強部屋から抜け出した時のごとく、如何にも氣を利かせた姉ぶって、口角を曲げた。

「……ね？」

立ち上がり嘉成に向かって手を伸ばしてきたと思ったのは、錯覚だった。

少女は相手の意志を慮る一言を問い、柔らかな笑みを湛えていただけだったのだから。

屋敷に囲われ、使用人たちに傳かれ、小さき姫はただ愛された。其れ故に脆く、儚い存在だった。

切迫感にも似た錯覚に身を任せた嘉成が、手を伸ばし掛けた其の時――地震は起こつたのだ。^{ない}

契機にして、嘉成は我に返った。少女が重心を窓の外に向ける。手を窓枠から突き放す。

地震の兆候の揺れが起こる中、嘉成は見ていた。緩りと其の情景を見続けて居た。

欧州調の懷古服が、^{アンティーク} 沙い月の光を受けて青白く映る。^{すくな} 釦が弾け散った跡と、開けた肌に自分が付けた痕。数々の痕跡が確りと解った。跳ねた魚が放物線を描いて戻る様に。

どさりと。

其の鈍い音は、冷たい風が頬を撫でたのと同時に、嘉成の耳に入ってきた。

凍った様に細い月が、真っ暗な闇に浮かぶ夜だった。

君知るや溶ける白華 4

森の入り口付近に辿り付いた時、イリスは何か雪の上に落ちる音を耳にした。

少し遅れて、ひゅんと冷たい冷気が肌に届く。積もった重みに耐え兼ねて、梢がばさばさと雪を落としていく音だった。

空が雲掛かっているとは言え、午後になって雪が溶け始めたのかも知れない。目を瞑って耳を澄ましてみれば、彼方此方あちこちで雪の滑り落ちる音を聞いた。

——とさり。

だが今の音は、梢と雪が擦れ合う音では無かった。予期せぬ出来事のような気がして、イリスははっと顔を上げる。

「……う……」

そして、目の前の光景が信じられずに、あんどりと口を開けっぱなしにしてしまう。

是れは一体如何した事だろう。少女が雪の上に横たわっている。

例えば其れが、木に登っていて、足を滑らせて落ちた物なら、彼女の頬に付いた雪も説明が付くだろう。崖から足を踏み外したただとか、雪崩で此処まで流されてしまったとか、無理にこじつければ納得が行く。

だが目の前の少女は——如何と説明出来そうに無かった。イリスが目線を戻した時に、もう其の場に『落ちて』いたのだから。

彼女の格好は易々と注視出来る物で無かった。釦ボタンが取れて居るのか、肩を大きく露出し、見慣れぬ行灯袴スカートの裾も捲れ上がって、太腿が露に為っている。

そして、イリスが最も驚いたのは、其の太腿の間から垂れ流れている『筋』だった。裾が捲れ露に為った太腿の間から、赤色と白濁色が混ざった、薄紅色の液体がつつと伝わり、雪の上に垂れている。
「う、あ……」

ぞわりとした。吐き気が襲って来る様な気がした。

恐らく、是の少女は、何処かで、誰かに。

「イリス？ どうしたんだ」

其の言葉にイリスの意識が立ち返る。一緒に歩いていた同郷の幼馴染が、此方に遣って来ようとしていた。慌てて上着を脱いでばかりと少女の上に掛ける。両手を開いて、この光景を見せまいと幼馴染に立ち向かった。

「……………人！？」

が、所詮イリスの小さな腕では、少女の姿を全て隠し切る事など出来ない。幼馴染は、様子に気我付いた様で 益々訝しみ、此方へ駆けて来る。

「だっ、だめっ！ カナンは近寄っちゃ駄目っ！」

其処でイリスは大声を発した。幼馴染の少年の足が、ぴたりと止まる。

「服がめくれてるのっ！ 私が一度直すから、あっち行つてて！」

「……………」

只ならぬ威圧を感じたのか、少年が引き下がった。

「……………小川を探してみる。僕が戻るまで、凍傷にならないよう処置しておくんだ」
フロストヴァイト

イリスが目一杯伸ばしている両手の、その向こう側に居る存在を一瞥し、彼は後ろを向いて歩き出した。

幼馴染の姿が小さくなった所で、イリスは改めて少女と向き直った。

上着を退かし彼女の裾を元通りに直す。釦が千切れて肌蹴はだけている上半身に上着を移動し、手持ちの鞆から水筒と綺麗な手拭を取り出した。裾を被せたまま、裾中に手を入れ、太腿の間を拭う。

……………だが、こんな…非道いこと…………

村での情操教育を、イリスは事早く受けていた。奉公に出向く際、

また戦が起こった際、望まぬ待遇を受けてしまうのは、大抵村出身の少女であるからだ。

少女の顔は憔悴し切っている。泣き腫らした跡があった。首には掻きむしった痕があり、辛うじて寝息を立てているが、苦しそうだ。この倒れている少女のぼろぼろになった姿を見た際、イリスは自分がされた事の様に気持ちが悪くなった。誰かに同性としての『誇り』を踏み躪られた気がして為らなかった。暴力に訴える事と何ら変わらない。同郷の少年に進んでみせる物でも無い。……もし自分だったら、少年に見られるのは厭だと思った。

……とにかく、こんな雪のところじゃなくて、どこかに休ませてあげなくちゃ……

少年が戻ったら、村へ一旦戻ったほうが善いだろう。

おばあちゃんのお友達に会う約束の日には間に合うかな、と一瞬イリスは考え、直ぐに否定した。

この少女の状態と、予め決められた約束を天秤に掛ける物では無い。村の皆も義理の祖母も、義祖母の友人も屹度きつと事情を察して呉れる。如何すれば善いかも、解って呉れる筈だ。

「……っ」

顔を拭いて遣っていると、瞼の辺りがぴくりと反応した。驚いたイリスは、手拭ごと手を少女の頬の上で離してしまう。数秒経って少女の目が虚ろに開いた。焦点の定まらない瞳が、此方を捉える。水筒の水が冷たくて、無理やり目を覚まさせてしまったのかも知れない。

「あ、あの……冷たかった、よね……」

相手を気にする様に途切れるのも当然だった。目の前の少女は自分より五、六歳は上に見える。

「でもいま水筒の水しかなくて…… 本当はもっと温かいお湯で拭いてあげればと思ったんだけど……」

現況把握が難しかったのだろうか。イリスの言葉を聞いた後で、少女が暫し固まる。

その固まった状態は、イリスも同じだった。やや語弊があるが、ぼんやりしている姿にイリスは見惚れてしまっていたのだ。黒髪で色白、濃い茶色というよりかは琥珀色の瞳。本でしか知らない、異国に住む少女。見た事のない衣装にすつと伸びる手足が映える。顔には一つも染みが無く、雀斑に悩んでいる自分とは豪い違いだ。

だが、次の瞬間、少女のその頬にかつと赤みがさした。自分がされたことの一部始終を思い出し、羞恥心が湧き上がったのだろうか。勢い良く起き上がるが、傷に響いたのだろう、痛さに顔を顰める。イリスは少女の意識を混乱させない様、努めて柔らかく話そうとした。

「あつ、あの、私拭いただけだから！カナンも見えてないしっ」

結局はあわあわする話し方に終わってしまったが。

「……カナリ……」

「え、ええと、カナンっていうのは私の幼なじみで、私を引き取ってもらった家の男の子でっ！ お兄ちゃんって呼んだほうがいいんだろうけど、やっぱり私にとってはカナンって呼んだほうがよくてっ」

困った。何を言っているのか自分でも解らない。目の前の少女だつてきょとんとしているではないか。

「……え、ええと……」

頓珍漢な事を喋ってしまったから、イリスは一呼吸置いた。

「とにかく、私たち、向こうの村から来たの。カナンが来たら、連れてってもらおう？」

「……………」

少女が琥珀色の瞳で、イリスを見詰める。兎みたいな動作だと思った。良く義祖母が教えて呉れた——言葉が通じない動物は、人の発した声の抑揚で感情を見極める。優しい声色を出せば心を開いてくれるし、厳しい声色を出せば警戒するのだ、と。目の前の少女が言葉を理解出来ないとは考えにくい。だとしたら、彼女が言葉を発しない理由は——発することが出来ないから、だ。

「そうだ！」

イリスはぱんつと手と鳴らした。びっくりと目の前の少女が震えるのを他所よそに、辺りを見回す。雪に覆われていない木下の叢むくを見つけると、大きな葉と防寒の上着を数枚敷いて、彼女を手招きした。

「……あ、あのね！ カナンが来るまで、お話してもいい？」
フロストヴァイト

凍傷には気を付けろ、との幼馴染の助言を受けて実行していたのもあったが、少女の緊張を解せないかと思つての事だった。彼女が其の場所に腰を落ち着けて呉れたので、イリスも隣にちょこんと座る。

……よかつた、嫌じゃないみたいで。

だからイリスは、考え無しにこう訊ねたのだ。

「あなたはどこから来たの？ ひよつとして城下町？」

聞いてから、自分ではつとした。彼女は口が利けないと知つた許ばかりではないか。

「ご……ごめんなさい、髪の毛とか瞳の色とか、ここの土地の人じゃないなつて……っ」

物凄く慌ててしまう。目の前の年上の少女の瞳は、物言わぬが上にイリスの胸に突き刺さるのだった。

勿論少女は悲しそうな顔を向けていた訳でも無く、恨めしそうな顔をしていた。訳でも無いのだが、どうせなら笑つておいて欲しかったのだ。

「えっ、えつとねっ、私のおばあちゃん、昔その城に仕えていたんだつてっ」

如何やらイリスは、余計な気を回すとぺらぺらと喋り出す傾向に有るらしい。自然な気遣いは、幼馴染の方が得意だった。彼に倣い実践してみたのだが、道程は険しい。

「どんなお仕事してたか知らないけど……急に昨日話してくれたんだ。今まで聞いたことなかったからびっくりしたし……でもなんでやめちゃつたのって聞いたら、しあわせになりたかつたからって云つてた。『何も知らないでいるからこそ、物事いきかたは万物あらゆるものと流れていく

ものだ』、って」

膝を抱え、蹲りながら話す。目を瞑ると、昨夜の情景が浮かんできた。難しい話を時折する義祖母だったが、昨夜の様子は、聊か変だった。矢張り城下町で会う予定だった人物と関係があるのだろう。孫である少年にも何か手渡していたようだった。

「よくわからなかったけれど、おばあちゃんが教えてくれた詩は気に入ってるの」

漠然とした不安を振り払うように、イリスは精一杯笑って見せた。

「しあわせはきつと　かぜにみずに、　ながれるものすべてにみえないものすべてに　にてるわ」

「……………“セイセイルテン”」

……………え？

少女が何か呟いたと思ったのは、聞き違いだったのかも知れない。何故なら、その意味を問い質そうとする前に、怪しい音が鳴り響いたからだ。

羞恥で顔を真っ赤にした少女に、ようやくイリスは合点が行った。荷物から黒^{パン}麺^{パン}を取り出し、食べやすいように千切って渡す。少女は恥ずかしそうに俯いていたが、イリスの勧めで口にした。場が気まずくならない様に、イリスは「そうだっ」と復^またもや手を打ち鳴らす。

「帰ったらスープ作ろうと思ってんだ。…カナンがいつも味見いやがるけど。よかつたらいつしよにどう、かな」

「……………僕は味見じゃなくて毒味が厭なだけだ」
「カナン！」

後方の声にイリスは驚いてしまった。振り返ると、渦中の人物が水筒と手拭と何か草を手にして突っ立っている。やや襟足に癖のある茶色の髪に、灰^{フラス}みがかった濃紺の瞳。幼馴染でも在り、共に住む家族でも在る少年だった。

「い、いつからそこにいたの？」

「『そうだ』から」少年は抗議するイリスを退け、雪の上に座っている少女に声を掛ける。

「創作料理をしなければイリスは及第点の料理だと思う」

数種類の薬草を揉み解しつつ、凍傷が有れば塗り込むようにと伝える。てきぱきと動くその様子に、イリスは矢張り「カナン」だと思った。自分は彼女を見て動揺してばかりであつたのに、少年は揺るがず的確に動いている。言葉は足りないが、彼は優しいし、面倒見が良い。小さい時から面倒を『見られている』自分が言うのだから、間違いは無い。

少年は雪の上に膝立ちになると、黒髪の少女と視線を合わせ、緩りと話しかけた。

「僕の名前は、カナンリエス」

略称された名でなく、正式な名前ですらを名乗る。

「その子の名前は、『シェイディア』アス『シェキラス』。きみの——名前は？」

少女の琥珀色の瞳が瞬いた隣で、イリスもまた、瞬きを数回行っていた。

……シェキラス？

何故彼は、国の名前を口に出したのだろう。シェキラスとは、この地に住まう者なら誰しもが知っている、代々統治者の刻み名だ。^{ソヴリン}それを——何故、イリスの名前だと話したのだろう。

少女はじつと少年を見詰める。それから、何かに気がついたように、視線を落とした。

その視線の矛先に、少年は気付かなかった。周りにイリスも少女も居ないかの如く、独り言つ。

「やっぱりか。“シェキラス”の名を呼んでも反応しない。ということ——」

「だ、だめだよカナン！」

勝手に結論付けようとする幼馴染に、イリスが制止を掛けた。こ

の遣り取りで精神状態や受け答えを試していたとしたら、早合点である。

「この人、まだ喋れないんだから。無理に聞き出そうとしちゃだめ」「聞き出す？ 誰がそんなことしようとしてるんだ」

「カナンがだつてば！ それに統治者の名なんて持ち出してどうしたの？ 私の名前は――」

イリスでしょ、とは最後まで言い切れなかった。話していた途中で、情景がグラリと揺れたからだ。

例えるなら、目眩めまいだった。立ち眩みが起こり、イリスの肢体が緩やかに曲がる。曲がる、曲がる、落ちていく。だが歪よこしまになっていたのは、イリスが見た景色ではなく、地面全体だった。

周りの木々に積もっていた雪が、一斉に落ちた。猛々しい声を上げて、地滑りした雪が向かってくるのが見えた。

「地震！？ 今頃かつ……」

幼馴染の少年が、胸元の物体オブジェクトを握り締め、忌々しく唸うなりっていた。

物体は――少年の手の中で鬱金色きんに光っていた。目で捉えられたのは其れだけだ。

「――イリス！」

何が起きたのか分からなかった。抽象的でしか恐怖は表せなかった。白が迫る。ほんの僅かな間に、イリスは暗闇くらやみに鎖くわされ、一切の色を、音を、温かさを失った。

これは夜なのか。凍った様に細い月が、真っ暗な闇に浮かぶ夜なのか。

いいや、昼だ。曇天の空が 突き刺すようないたみをくれる、厳冬の昼だ。

……やだ。こわい。たすけて。やだ。やだ、カナン！

白い獣は、叫び声すらも掻き消して行った。

ただイリスを、常闇に鎖したままで。

君知るや溶ける白華 5

粉雪が舞っていた。

階上から落下しても、痛みは無かった。

冷えた身体で感覚が麻痺しているのだろう——落下した際、木々の梢に打つかったか、積もり積もった雪が緩衝材に為ったか。不思議な事に未だ生きていた。灰色の空が視界に映り、焼き付ける様に目を閉じる。此の儚朽ちてしまえばいい。しろい此の大地に埋もれてしまえば善いと。

「——」

「——」

異国の言語を遠くで聞いた。仲睦まじく語り合う声。幼い少女が燥ぎ、年上の少年が窘めている。閉じ様としている意識では、耳を澄ます事も俛為らない。だが其の聞き取れない少年少女の遣り取りは、何処か懐かしかった。

自分にも、あんな風に笑い合つて、雪の中で燥いでいた時が有った。窘める役の少年は、何時も傍らに居て呉れた。擲つて雪の上に倒れる真似をしたつて、困惑と呆れた表情を浮かべ、膝を曲げて、手を此方に伸ばして呉れていた。

「——^{かなり}嘉成」

空に向かつて腕を伸ばす。嘗て共に居た幻影の手を、空を掴むと分かつていながら、握り締める。

「お嬢様……」

途端、其の手を握り返す温かい手が有った。

何かに後押しされたように、目を開ける。幻影が鮮明に映った。冷えて震えている此方の腕を、血の通った温かい手で力一杯握られる。雪の上に^{ひざまず}く、倒れた此方を見下ろしていた。

「……そんなからだで……どこへ、行こうとしたんですか……」

——どこへ？

反芻しようにも、声が出ない。空を掴む筈の掌が、温かい何かに包まれているではないか。

皺くちやになった顔。紫色の唇が必死に言葉を紡ごうとしているが、声が掠れてしまっている。初めて会った時に見惚れた、透き通った色の瞳が揺らいでいる。洋燈ランブの灯あかりの様だ。水面の様だ。其の潤んだ虹彩に、自分が小さく映っている。

「俺は……っ」

ああ、此れはしあわせな夢を視ているのだと思った。

記憶の中の少年が、こんなに血相を変えて自分に会いに来て呉れる事等、有り得ない。

落下した時に見た彼の表情は――矢度やっと 呪縛から解放されたと云う、安堵と自嘲の笑みを浮かべていたのだから。

「俺はきつと、あなたを憎むことしかできない」

其の少年は 此方の手を取り、自らの額に押し付けた。悔恨の念を打ち明ける様に訥々と語る。

温い水が、感覚の無くなった筈の此方の手に流れ移る。雫が腕を伝い、落ちていく。通った痕が空気に触れた。

「穢すことしか……貶めることしか、できない」

其処で自分は首を振った。もう終わった事、とでも言うかの如く。……いいえ嘉成。あなたも知らないことがひとつあるわ。

しあわせな光景を脳裏に浮かばせながら、思う。

……あのまま屋敷に居たら、私は確かにあなたの手解きを覚え、愛されることを学んだでしょう。あなたにつけられたこの唇の跡さえも、手のひらに落ちた白華ゆきのように、体温になじみ、やがて消え失せていったでしょう。

凍えて感覚のなくなった唇を、無理に動かそうとしながら、願う。

……それでも。それでも、ね、嘉成？

意識が閉じ行くこの軀体からだでは、彼に伝える事が出来ない。

……清らかな偽の手を、差し出されるより、私は。

共に居てくれた。傍で見守って呉れていた。時に窺めて呉れた感

謝の意を。

……穢れたほんもの手で触れてくれたほうが、私は嬉しかったの。

嗚呼、自分は今から何処かへ『行く』のだ。

「来てくれて有難う、嘉成」

せめて微笑んで見せた。もう望みは無い。此の儘一緒に居る事が、枷に為ってしまうのなら。お互いが苦しめられてしまうのなら。

今、心が触れ合ったこの一瞬が自分にとって全てだ。

「——しあわせだった」

「嘉成さま」

扉叩ノックの音が聞こえて来て、執事で在る男は目を覚ました。

暖炉に焼べた薪がぱちりと爆はぜていた。此処は、暖かい。

気が付けば書齋で眠ってしまったらしい。読み掛けの本が洋燈ランプの揺らめく灯あかりに照らされている。

「あの、今——お取り込み中でしたか」

「いや、違うよ。うとうととしてしまっていただけだ」

男は眼鏡を手に取り、扉の向こうに優しく答える。

「入りなさい」

やや間が空いて、戸ドアが開いた。洋館の女中メイドに相応しく、黒い衣服に身を包んだ少女が入って来る。

年の頃は推定十八、九。『推定』であるのは、少女が此の洋館に拾われ、身元不明の儘働き始めた身分だからだ。

微かに左手が震えていた。其の震えを隠そうとする為か、彼女は必ず右手を左手に被せて一礼する。

「心配させてしまつて悪かった。……皆には挨拶してきたかい」

目を伏せて視線を合わせない彼女に、男は先ず^{ひたひた}勞った。長年仕えている反射的な物が、質問されて少女は顔を上げる。幼い頃は雀斑^{そばかす}を頻りに気にしていたが、今では珠の様な肌と調和して目立たない。淑やかな仕種、柔らかい顔立ちに相まって、混血児かの如く美しく映える^{はじみ}榛色の瞳。誰もが羨む、艶やかな暗金色の髪の毛を黒に染めたいと発言された時には、屋敷の人間が総出で考えを改めさせた程だ。

「……いいえ」

女中の少女は首を横に振った。男はそうか、と返し、眼鏡の縁を持って掛け直す。

「それなら、出発する前に皆に一声掛けておきなさい。旦那様が取り計らってくれた縁談だ。あの志村家の末嫡子は、お前を孤児^{みなしこ}と蔑まない。きつと幸せにしてくれる」

良くこんなに穏やかに、美しく育つて呉れた物だ。男は内心で彼女を賞嘆した。当時数えで二十だった自分が見つけた時は、あんなにも竄れ、人の仔で無かった様なのに。

「いいえ……いいえ！」

彼女は問いを否定した。洋物の椅子に腰掛ける此方を確と見る。決壊する前の堰か、駄々を我慢する子供か、感情が溢れるのを抑えている表情を向けていた。男は冷静に訊いた。

「彼をまだ、信頼できないかい」

「いいえ……あの志村様のことを言っているではありません。わたくしは、ずっと此処に居たいんです。できることなら、この屋敷のために、嘉成さまのために働いていたい。けれど、拾ってくださった旦那様を裏切る真似などできません……！」

男が何時までも冷静に対処する反動だろうか。はらはらと涙を流して、少女は訴えた。

「ずっとお慕いしておりました。嘉成さま……」

微動だに出来なかった。一回りは違う少女の切実なる思いが、真摯な声が、部屋に凜と響いた。

男が少女を見つけたあの日から——十年が経とうとしていた。

いつかと同じ、地震で雪崩なだれが発生したあの日、雪の中から一人の少女が助け出された。年は推定、九、十歳。助け出された少女は、服も何処の者が判らない程千切れ、全身が凍傷に為り掛けている有様だった。言葉も理解できず、喋れず、身体も上手く動かせない——今も猶お、少女の左手には麻痺が残っている。

引き取り手のない彼女を、屋敷で雇うと進言したのは男だった。録に言葉も喋れない少女に、言語を一から教えたのは男だった。生きる術として、屋敷の仕事を覚えさせたのも男だった。

仕えていた先の一人娘が行方知れずになってから数年が経ち、火が消えたように静まり返る此の屋敷で、彼女は愛らしく振る舞い、皆に愛された。何処か幼さの残る顔立ちに成長した少女に、家主は娘が蘇ったかの様に接した。招かれた上の家柄の末嫡子が縁談を申し入れるのも時間の問題だった。

自らの罪滅ぼしのように彼女を見守り、育ててきた。縁談も纏まり掛け、肩の荷が降りかかっていた所で待っていたのが——予想だに出来ない 少女のこんな独白だったとは。

「嘉成さま。わたくしは……記憶を失ったものではありません。封じ込めていたのです」

暫くの沈黙が流れた後で、少女が話し始める。

「覚えております。わたくしは、かつてどこかの村に住み、血の繋がらない兄と共に暮らしていた。兄がわたくしに言い残したことがあります——ですからわたくしは、振り切って生きなければならぬのです」

揺ぎ無い瞳をしていた。青い色が、一層濃く映る。

「あの兄とはもう会えませんが……いまは、嘉成さまのお傍にいますとだけが望みでございます」

「人を心から大事に思うことなど——私には赦されないのだよ」

沈黙で 男は漸く平静を取り戻し、少女に切り返した。

「私が愛するは憎悪するのと同じだ。良く聞きなさい。私はお前を

憎み、穢し、貶めることなどできない。それはお前が、私を含めた屋敷の人間にとつての娘だからだ」

男は、嘗て己が仕えていた 屋敷の一人娘の姿を思い出す。

窓から落下し、駆け寄つた時にはもう衰弱し切つていた あの少女の事を。

雪崩が起き、一人娘は助け出されなかった。自分だけが生き永らえてしまった。

刷り込まれて麻痺した感情だった。憎む事しか出来なかった。穢し、貶める事しか頭に無かった。自分が自由に生りたいが為に、何も知らない相手を追い詰めた。気付けた筈だった。自分が流している涙の意味、狂おしい程の此の感情の名前、——暖かいぬくもり。手を引つ張つて呉れた あの手の温かささえ信じていれば、男は道を違える事等無かつた。

「虹子^{ニッコ}」

少女に近付き、男は彼女のほつそりした手を握る。血の通つた温かい体温が、男にも伝わる。

二度と違える事等無い様に。彼女のぬくもりを確かめる様に。

「お前の名前を旦那様に進言したのは私だ。——“虹彩”^{イリス}、とお前は自分の名前も言つていたからね」

女中の少女は俯き、ぼろぼろと泣き出す。厭々をするのと同じく、尚も首を横に振つた。吃り上げる彼女の手を確り握つて、男は感情を込めて云つた。

「告げられたことを守るのなら、前を歩かなければならない。私は、お前の幸せを見届けたいんだ。……お前を護つてきた、たつたひとりの兄に代わつてね。」

温かい暖炉の傍で、うたた寝をしていた執事は夢を視た。

例えば其れは、此処より遙か彼方の別の世界、未来でも在り過去でも有り得る場所。

此処と同じく広がる白い大地の向こう、家裏の小屋で、一人の少女が貯蓄された麦を抱え込もうとする。均等バランスが崩れ、零れ掛けた麦の穂を、傍から慌てて支える少年が居る。やや間が合つて、お互いの滑稽な姿に笑い合う。

慎ましくも平穏な生活。あの少女の隣に居るのは、自分だろうか、其れとも他の誰かだろうか。

唯 ひたすら只管に願う。

赦されない物であっても。愚かな物で在っても。独り善がりに満ちた希だとしても。

如何か、『彼女』が幸せで在る様に。

君知るや溶ける白華 6

城下町の家裏に在る小さな土地は、昨夜降った雪に拠って白く埋め尽くされていた。

いつの間にか粉雪に為ったらしい。今日中で有れば、吹雪に為る事無く村に行けるだろう。

青年は、手袋ミントの上に粉雪を乗せてみた。皮に覆われた掌てのひらが、僅かに白く染まってい。直に手に乗せれば、結晶が指の温かさで溶けて行っただろうか。

そんな思いも頭を過ぎったが、体温を無闇に下げることが避けたかった。

『約束』の日は来た。過去と向かい合なければ為らない日が来たのだ。

青年は粉雪を丁寧ていねいに払うと、真新しい銀色の世界に居る誰何を探した。

毎朝いつもと同じように、家の裏手の小屋に向かって歩いている少女の事だ。

寒くなる前に麦や果物を貯蔵した貯蔵小屋――朝になると その小屋から麦を取ってきて黒麵パン麴を作るのが、少女の日課だった。

青年は姿を見付けて呼び掛けようとする。

「――」

併ししか。少女を呼ぼうとして、喉の奥がぐつと締まった。吃驚おどろいて声を出すのを止めてしまう。

わらべ謡うたが聞こえたのだ。

聞き慣れぬ音調。不思議な言葉。独特の発声法。

白い雪の上に、黒い髪が踊る。広がっては元の場所に戻る綴帳カーテンのように、彼女の黒髪は風を受けて靡なびく。羽織から覗く白い指が、寒空の大气に触れる。

此の地に『来て』から、何度も見た景色の筈だ。其れでも、城下

町の家を出て、真っ白な土地を見て 開放感で一杯に為ったのだろうか。淑やかな彼女にしては珍しく噪いでいた。

何故、彼女の紡ぐ歌がわらべ謡と思つたのか解らない。

彼女の声質がそうさせるのだろうか。流れる曲は物悲しい語りの様でも、懐古的な歌の様でも有った。

逡巡しながら眺めて居たのは十秒にも満たない。少女が不意に此方を向いた気がしたからだ。

青年はすうと息を吸い込むと、彼女の『今』の名を呼んだ。

「キリエ」

声に気付き、少女が視線を合わせる。

歌は口遊ハミングに為って居たが、耳に残る不思議な音程は続いている。

追いついた青年は、朝の挨拶を交わす前に訊いた。

「……その歌は、きみの故郷くにの歌かい」

少女の濃い茶色ブラウン、何方かと言うと琥珀色アンバーの瞳が、僅かな間 見開

いた。

彼女自身も、指摘される迄 口遊くちずさんで居た事に気が付かなかったらしい。

「ええ。もう歌うことはないと思つていたけれど……口をついて出るものなのね」

まるで其れが『歌つては不可いけない』と言う様な、跋ばつの悪い顔をする。

青年は重ねて訊いても良かった。何時いつ覚えたのか、今の歌の歌詞は如何な意味なのか。

だが――聞く前に、相手は隙の無い顔に戻つて居る。

少女は身を翻した。ばさりと羽織コートが揺らぎ、周りの粉雪が振り払われた。

「よかつたらリエスも麦を運んでくれないかしら？ 出る前に焼いていこうと思うの」

彼女と共に居る事は、其の儘あの雪の日から遠ざかる事を意味していた。

——五年前、此の地の『サクリファイス人柱』は死んだ。

城に届ける筈だった秘匿の皇女は、雪崩に巻き込まれて消えた。なだれ

青年は覚えて居る。姫まへの託した六角水晶クリスタルの残滓で、自らが取った行動を。忘れる筈等無い、思い出す度に體からだが震えに襲われる。

企みは成功した。アースクウェイク地震が引き起こした雪崩が元になって、磁場テンスルが開いた。クリスタル六角水晶の残滓が時の流れを緩やかにし、機を見計らった青年は皇女を割れた隙間へ送り込んだ。：姫の言う、『シンクロニティ共時並行世界』へ。

姫は何処迄でも逃げると言った。あの御方の未来を案ずるので有れば、私達を、村を、城を敵にしても護ってゆけと告げた。イリスを頼む、と。

だが——青年は、姫の言う通りに、二人で一緒に逃げる事をしなかった。

二人で逃げ続けることが、果たして秘匿の皇女の幸せに繋がるのか。此の土地に居る限り、此の次元に居る限り、皇女は柵しがらみから解放されない。姫を残し、村と城を裏切り、シンクロニティ共時並行世界へ逃げさせて——皇女を護れると言えるのか？

自問自答した中で、答えを導いたのは、落ちて来た少女の存在だった。

この地の統治者である“シエキラス”の刻み名なまえを話しても、反応しない年上の少女。見慣れぬ髪の色、目の色、肌の色。姫から聞いていた事と同じだった。やや有って、地盤が揺れた。地鳴りがした。磁場テンスルが開いたのは『アースクウェイク地震』が引き起こしたものだっと思った。

青年の出した答えは明確だった。

シンクロニティ共時並行世界へ皇女のみを行かせ、自分は此処に残る。

皇女は雪崩に巻き込まれ、最期を見届けたのが自分だと報告する。任務を遂行しなかったとして、城の審問会に監禁される一生にな

ると重々承知していた。村と城を敵に回し、術を教えて呉れた姫を裏切ったのだから。

けれども、事態は違っていた。

青年と少女は、雪崩に巻き込まれた後で、城下町近くの人間に拾われたのだ。

衰弱し切っていた少女は、高熱が三日三晩続いた後で、絶望的な状況から序所に回復していった。

一方で、青年は城の公式な報を耳にした。——秘匿の皇女は病死した。責任を取って、村で秘匿していた一家は焼き死んだ。崩御した皇女の御体は丁重に葬られ、村は聖域地区となつて出入りが禁止に為っている。

そんな莫迦な、と青年は耳を疑った。自分は未だ村に『大儀』を果たしたか如何か 報告すらしていない。其れなのに既に村の家が焼かれたと報が来ている。姫の遺体が上がって来て居ると報告が有る。時機が良すぎた。真逆——姫は、青年と皇女を送り出す時点で『先読み』していたのだろうか。青年が皇女を如何するか、共時並行世界から来た少女と如何出会うか、然して 青年の出した答えを見通して、『証拠』を焼き払ったと言うのか。

臍を噛む思いだった。村全体で皇女を育ててきた以上、青年に加担したという全ての証拠は消さなければならぬ。だから姫は自らと家を焼き消した。今、自分が出て行ったら、生きていると知らしめる事になり、村の人間にも城の目が行ってしまう。だが、村に行かなければ、全ての事態の把握が出来ない。死ぬ筈が無いと此の目で信じたかった。

加えて身体は、凍傷は完治した筈であるのに、城下町を出る事が適わなくなっていた。村へ戻る積もりで町を出ようとすると、体の震えが止まらなくなるのだ。寄りにも寄って、向かおうとしていた此の城下町に自分が居るとは、皮肉だった。痛くて堪らなかった。秘匿の皇女、姫、村と板挟みになった精神は、疾うに軋みを上げていた。

齒痒い思いをしながら、城下町で青年は少女と共に過ごし——五年が過ぎた。

「村に行くつもりなら、私も連れて行つて欲しいの」。

そんな少女の申し出があつたのは、今から三月も前になる。

青年の体と精神の傷が癒えるまでに五年を要した。少女の居場所も出来た今、機会を伺い自分の村へ戻ろうとしていた青年を、少女は勸付けていたのだ。

同じ地の 村から町へ来た青年に比べ、共時並行世界から来た少女の順応振りは凄まじい。
シンクロニシティ

記憶を失っているのか、異国から来たのか——此の土地の言葉も知識も家事も何一つ知らない彼女は、強かに生きた。したた深く理由も聞かずに家に置いてくれた城下町の店主の下で、最初は病気の老人の看病をし始め、言葉も通じない環境で、皆と意思疎通を図る様に成った。

元々聡明だつたのだろう、彼女は瞬く間に此の地の言葉を覚えてしまった。今では進んで店主の手伝いをし、看板娘に為っている程だ。

然して今、青年は 彼女と共に、あの雪の日に向き合おうとしている。
そつ

短い様で長い年月だつた。としつき秘匿の皇女の声も、青年は忘れ掛けている。

「キリエ」

少女と共に麦の穂を抱えた青年は、小屋を出て 先を歩く彼女の名を再度呼んだ。

「どうしたの。リエス」

振り返った彼女の胸元には、服の下で『六角水晶』クリスタルが光っている筈だ。青年が嫗から託され、そして復た青年が少女に託した、あの水晶が。

「どうして君は、僕をそう呼ぶんだい。普通、愛称は後ろを略すものだろう」

彼は、本当に聞きたい事柄と違う事を訊ねた。本当は如何でも善い。自分が如何呼ばれるか等、大した問題では無い。だが青年は、是を足掛かりにして如何しても聞いておきたい事が有った。

「……違う。どうでもいい。本当はずっと訊きたかったんだ、きみの」

一呼吸区切って続ける。

「きみの、本当の名前を聞かせて欲しい」

さあつと粉雪が舞い散って行つた。

城下町の雪は、水を多く含んでいて湿り氣が有る。青年の故郷の様に更々と流れるのは、本格的に降る前の粉雪の時だけだ。

長い黒髪を惜しげも無く麦穂に晒し、少女は麦の穂を抱え直した。ふるふると首を横に振る。

「私は一度、自分の名前と共に死んでしまったのよ」

麦の穂に隠れて、少女の微笑が見えた。

寂しくて、張り詰めた糸が切れてしまいそうな、そんな崩れる前の表情だつた。

「貴方に告げた名前が、今の私だもの。……その名前で私を呼んでくれたら嬉しい」

青年は何も言わなかった。

頭上から雪が舞い落ちて、麦の穂に掛かって行く。

『しあわせはきつとかぜにみずに、ながれるものすべてに、みえないものすべてににてるわ』

「『しあわせは似ている』……か」

空を見上げて青年は呟いていた。

嘗て^{かつ}嫗と秘匿の皇女が、其の言葉を口に出して居たのを思い出しながら。

見えないものの全てに似ている。ならば此れは雪の様なしあわせなのだろう、と皮肉った時が在った。

雪の様に空から現れ、形に残るもの。捕まえた瞬間に手のひらの上で溶けてしまう様な、そんな雪のような限りの有る幸せであるのだが、今は。

中途半端に残して消えていく、是の雪こそがしあわせの形であると、気付いた。

「ねえリエス。……雪は、綺麗ね。」

空を見上げながら、少女が同意を求める様に呟く。

「ああ。……ああ、そうだな……」

青年は再度 頭上に目を向けて見た。

白い花弁が後から後から降ってくる。代わり映えのしない灰色が、屋根と屋根で狭まった 町の空から覗いている。罪も咎も無い、無垢な白を一心に降らせている。

苛立ちは——もう無い。

代わり映えの無い空は、此の場所も灰色に染め上げている。

此れは夜なのか。凍った様に細い月が、真つ暗な闇に浮かぶ夜なのか。

いいや、昼だ。曇天の空が 突き刺すようないたみを呉れる、厳冬の昼だ。

「……イリス。聞こえるかい」

其れなのに何故、声の主の姿が見えない。

何故自分は、其れに答えることが出来ないのだろうか。

「僕はこれから、きみを『此処ではない場所』へ送り出そうと思う。

……君が命を狙われない場所に」

意味が解らない。嫗のお使いは如何なったのだろう。大切な人に

何かを渡すのでは無かったか。

問い掛け様としても声が出なかった。凍傷に為り掛かってしまったのだろうか——先程の揺れから始まった雪崩に、若しかして自分は巻き込まれてしまったのか。だとすれば此処は何処だろう。目が開けられない。身体が動かせない。だが、声の相手は自分の傍に居てくれた。

「僕は、きみのために生きる」

抱きしめられた。力一杯、胸板を押し当てられた。背中に回された手が、震えているのが分かった。

「だからきみも、生きてくれ」

如何してそんな、切ない声で囁き掛けるのだろう。

嗚咽を堪えた様な、此方の息が止まってしまいう声で云うのだろう。

「……生きていて、ほしい」

頷く事も首を横に振る事もできない。せめて、ひとこと伝えたかった。

相手が悲しまないように。笑って呉れるように。

カナン、わたしは——しあわせだよ、と。

君知るや溶ける白華 6（後書き）

【――赦されるなら忘れなければならぬなら想いを断ち切ると君に言いたいせめて僕の口から伝えたい。】

矮星の静寂 1 (前書き)

誰が 「ロビン・ロビン」 駒鳥を殺したか？

「それは私」と言うには雀 「スバロウ」

「私がこの弓と矢で

—— 「ロビン・ロビン」 駒鳥を殺しました」

Who Killed Cock Robin?
-
My Mother Goose Nursery Rhymes

矮星の静寂 1

齒の根が合わない音だった。

抑えようとしても止むことはない。がちがちがち、がちがちがちがちと不協和音を鳴らし、それが響いてしまうのが怖くて、少女は無理に下唇を前歯で噛む。音は止まない。力の入らない奥歯が小刻みに揺れ、顔が強張る。息を吸って吐くという動作が困難になる。右手を左手で押さえつけながら、少女は身を縮こませ、目を硬く瞑った。

目裏にこびり付いているのは黒ずんだ赤。耳朶じだにこびりついているのは金切り声。

途端に喉の奥が引き攣る。唾を嚥下えんかしようにも、からからに乾いて舌を濡らせない。

あのどろどろに溶けた赫い液体は、生き延びると言い残した父の血だ。あの場を劈つんざいた音は、出てきては駄目と警告した母の断末魔だ。

目を瞑つむることが出来たなら、一時いつときでもこれは夢だと言い聞かせられたものを。先程の凄惨な情景が焼きついて、少女は耐え切れず目を開けるしかなかった。

月が侵され消え失せた夜だった。寝台に入る刻、村の鐘がけたたましく鳴り響いた。外を見れば一面が橙色に輝いている。近隣の家を焼く炎の色だった。何処かで上がる悲鳴、野太い男の威嚇と壱声、擦れる刃の音、木の爆はぜる音、変容した村の騒音に入り混じって、父親と母親が部屋に飛んできた。血相を変えて少女の手を掴み、家を抜け、奥に隠れていると一方的に納屋なやに突き飛ばされた。

いったい何が起こったと言うのだろう。自分らが何をしたと言うのだろう。冷え切った納屋の中で、少女は血色悪く紫色に染まった自分の指を、必死に押さえる。

……天空そらに御座おわします我らが御主そふよ、御妃そはよ。

礼拝の言葉も続かなかった。納屋に隠れて一時間、最初の詠唱を只管繰り返すだけに終わる。天空に御座します我らが御主よ、御妃よ、天空に御座します我らが御主よ助け御妃よ、どうか、どうか、天空におわしますだれかわれらがたすけて御主助けて御妃よ、たすけて助けてどうか助けて助けてどうか誰か助けて！

不意に。納屋の戸がかたりと開いた。

白い羽根が舞い込んできたと思ったのは刹那か。目を瞬かせてしまえば、その羽根は吹き込んできた雪の欠片に過ぎない。だが、一面に敷き詰められた白の大地が反射して、薄暗い納屋に逆光が映る。腿まで届いて靡く髪、此方に伸ばしてくるしなやかな手……この方はもしかして聖典に出てくるあの御方の化身ではないのか。

御妃様、と声を出し掛けて、少女は息を飲んだ。

「やっと思つけたわ。村の最後の一人」

先に、低く艶やかな——想像していた御妃様の化身と正反対の——声を聞いたからだ。

納屋の戸が全開にされたことで逆光が解け、誰何の姿が露になる。確かにしなやかな手だったが、化身は見慣れぬ衣装を纏っていた。髪は確かに長くさらさらと靡いていたが、闇夜のように重く沈んだ黒色だった。肌は陶器のように白く、しかし眦は猫のように丸く釣り上がり、唇は濃い紅を差したかのように艶かしく——そして歪曲した。

「あ、あ、あ、あ」

弛緩していた筋肉が一気に収縮する。御妃の化身どころではない、死の匂いを運ぶ存在の姿が浮かんた。いや、違う、この女は——！

「骨が折れたわね。あなた一体どこに隠れていたの」

……『魔嬢』！

強迫観念で相手の名が弾き出たが、少女はそれを声に出すことなど出来なかった。

自身の髪を掻きあげ、女が問うてくる。だがそれは嘲笑を含んだ物で、返答を待つ悠長な問い掛けではない。事実、少女が堪えきれ

ずがちがちと盛大に齒の根を鳴らすと、いつそう女はその眼を鋭くさせた。

噂に違わぬ、奇妙な出で立ちだった。両袖は振るほどに生地が長く垂れ下がっており、襟元は巻いた葉のように、幾重にも折り重ねられている。下半身の服は男物の段袋ズボンのように股で分かれていて、合理的なのか非合理的なのかわからなかった。異国の服装とはこのようなものか。

「ああ、この衣装が見慣れない？ これはね、『袴ハカマ』というもののよ。私達の国の民族衣装」

仕留め損なつた獲物を、窮地に追いつめてほくそえむ。

大人同士の談義を偶然聞いてしまったことがある。隣国の王である皇嗣みこが、領土拡大の為に大掛かりな軍隊を編成して、近隣地まで踏み込んできているらしいと。財源の確保が目当てで、国交が断絶していると。成果を上げているのは、ある部隊で、指揮を執っているのは——辛辣で傲慢で、非情極まりなく、嬢の齡で魔王の如き采配を振るう女であると。

「高階タカシナ」

かくして、人々に『魔嬢』とこぞつて隠喩され恐れられるその女は、右に目を向けた。

「斬りなさい。今直ぐ」

女低声アルトの簡潔な物言いが、粉雪と冷氣に混じつて少女の耳に届いた。

がんと頭を強く打たれたような衝撃が加わる。

『斬る』。今この女は、隣に居る者に自分を斬れと命じたのだ。

「はッ——斬れ？ マジで俺のでそいつ斬れつつてんのか？」

柄の悪い男の罵声が飛んできた。続いて、調子狂つた嬌声ひとしきが一頻り小屋に飡する。狭い戸口の右端から現れる人影——右に黒い眼帯を取り付けた男の姿。黒様式の服、黒皮靴を履き、黒手袋を嵌めた物々しい格好。それが帝國軍隊の特別側近制服であることに考えが

及ぶ筈もなく、少女は螺子ねじの外れた笑い声に怯えた。

一転。男は脈絡もなく甲高い笑い声を止め、鋭い眼光で女を睨ねめ付ける。

「ふざけた事そのクチでくっちゃべってんと殺すぞ。ンなガキ、クズ笹目ササメの相手にでもさせろや」

常軌を逸している。眼帯の男は、覆われていない方の黒目を左に動かした。

「ホラ ムツツリ、相当溜まってんだろ？ ガキに一発ナカ出してその腹搔さつ捌はいちまえよ」

顎あごでしゃくり上げると、せせら笑う。

眼帯の男の左側には魔嬢と呼ばれる女が居る。そしてその女の左隣——出てきたのは、第三の男だった。

「……下賤な物言いだな、『狂い馬』」

恐らく 揶揄する言い草で、第三の男は冷徹に言葉を返した。『

狂い馬』、確かに眼帯の男の振る舞いは、その呼び名が相当する。

かくいう第三の男の姿も、少女にとって異様であることに変わりない。眼帯の男と同じく、厳しい黒様式の服の格好だったが、男の右袖が抵抗することなく風に戦そよがれていたからだ。第三の男は隻腕であつた。——ことに、威圧を受けるこの物々しい軍服で、片方の腕が見当たらないというのであつては。

「血を見せ付ける必要がある。私の尖剣レイピアと嬢の短剣ダガーとで突くより、お前の軍刀改サーベルで斬つた方がよく飛び散る筈だ」

隻腕の男が、事実を淡々と隣に告げた。女を挟んで隣に居る眼帯の男は、答えない。

「たかだかお前の様な『忌応体』が、総て赦されと思うな」
「笹目」

吐き棄てる言い方を咎めたのか、宥めたのか、女が口を開いた。
「この娘に私の名を教えてあげなさい。通り名でしか知らないでしようから」

「——は。御前にありますは六伽藍國第六皇嗣者リクガランコクにして、外討伐隊

第十六指揮官・久稔和歳雪紗銀様であらせられます」

六伽藍國第六皇嗣者——後の言葉は聞き取れなかった。元が同じ国で同言語体系とはいえ、数百年が経ち各々で発展した今となつては、発音と意味の相違が多々有る。もはや異国となつた地の言葉は、聞き取れない。

だが皇嗣者という冠を訊き、少女はまた慄くおののだった。

第六皇嗣者にして外討伐隊揮官とは、なんということだろう。『魔嬢』と呼ばれ近隣諸国で恐れられている女の正体は、六伽藍國と呼ばれる国の冠を有す後継者だった。その皇女が自ら指揮を執っている。隣国は血筋を前線に出しても何も思わないというのか。

「よろしい。そして私の右側に居るのが笹目。左側に居るのが——高階」

斬り落とす者への最後の礼儀か。外の國で六番目にあたる後継者は、左右の連れの名も明かした。

しなやかな指で再度髪を後ろへ撫で付けながら、非情にも決定を言い放つ。

「笹目。左胸から頭にかけて突きなさい。掻き回した後に引き抜けば飛沫も上がるでしょう」

「承知」

「高階。斬る代わりに『あれ』を」

左隣の男の返答の有無など聞く由もない。少女の感覚は麻痺していた。怒りと困惑と畏怖は震えを通り越し、却つて少女を冷静にさせた。結果、彼女は弾かれるように声を発した。

「……ディアボロ 鬼魔、だわ」

少女の国でもっとも忌避される聖典の言葉を、彼女はかつと目を見開き、投げつけた。

「鬼魔の化身に違いないわ……あなたたちは人の道から堕ちた鬼魔よ！」

だが、返答の代わりに少女の耳に届いたのは、火付け石のような指を鳴らす音。

——獣が嘶く声が響いた、と思ったより早く。

かつ、かつ、と革靴の音を出しつつ、右の男が前に出る。素早い動作だった。鞘から得物を引き抜き、自身の手首を捻って先端の尖った方を天に向けたかと思うと、その細い針先が消え失せた。ごりり、ぶつりぶつり、と聴いたこともない音が体の内側から聞こえた。硬く鋭いものが体を通していった。熱い感覚とともに訪れたのは、息を吸えなくなる苦しさ、口の中に溜まったものが飲み込めない苦しさ。細槍が自身の身体を貫通していると知ったのは、隻腕の男がそれを引き抜き、数回同じ箇所をずぶずぶと刺して掻き回した後だった。

「あ、う、あ、あああああ」

ずるりと熱いものが背中からはみ出てくる。躍動の如く其の場に跳ね、少女は霞む目で天を見上げた。

小屋の天井が赤黒く染まっている。まだ塗られたで、所々から液体も滴り落ちている。自分の体内の飛沫だ、と理解する間もなく、少女の視界を塞いだのは『黒い塊』だった。黒く尖った角、激しい怒りに満ちた黒い大きな獣の目。黒曜石の如き混じり気のないその目に、血を垂れ流す少女の姿が映った。黒塊の巨大な口が開き、体ごと飲み込むようにして、実際は首から上を挟み込まれ引き千切られるようにして、少女はあらゆる体液を流し絶命した。

「悪いわね。私はまだ——」

首を噛み千切られる直前に、少女は女の声を聞いたような気がした。

「——堕ちるわけにはいかないのよ」

矮星の静寂 2

——甲高い嘶いみなきが耳みみを劈ついた。

引き千切った、というよりかは、もぎ取った、という表現が正しいか。

今し方吐き出された肉の塊いちべつを一瞥ひとし、無残な変わり様に 笹目ササメは眉ひそを顰ひそめた。

鼓動三音前には村の少女であつた眼前のモノは、既に異様な肉塊に成り下がっている。

頭上に近い箇所は蒼白し、もげた首周辺は紫に染まっている。顔面は斑色まだらに変化し、齒で掠め取られたような擦り傷が幾つも見られた。鼻であつた箇所は削そげ、恐怖の為に見開かれた眼窩がんかが凝固し、乾き始めている。

村の『殲滅せんめつ』遂行は完了した。夜を奇襲し、松明たいまつに火を点け、混乱の最中家に押し入った。粗方済んだところで軍を退ひかせ、自分を含めた三人と一匹で残党狩りを行った。二百名程度の集落に子供は五十、大人は百五十、老人は五十。全て残らず裂いた。出来るだけ血が流れるやり方で、尚且つ残忍な切り方で。

これで他の集落は恐れ戦おのき、無駄な抵抗をしないだろう。被害は格段に減り、此方も無益な殺生をしないで済む。軍の総統も威圧は掛けて来ない筈はずだ。『魔嬢まじょう』の名は大陸に遍あまねく知れ渡り、六の順序に辱められることもない。権威に座する日も——現時点での継承有力者共の鼻をあかしてやれる日も近い。

「……は……っ はアッ……」

獣の雄叫びに混じって、『上司』の乱れた呼吸を聞き、笹目は現実に立ち返った。

薄暗い納屋で、袴に身を包んだ女が息を荒くしている。

身体を小刻みに震わせ、膝が笑っていた。目は強張り、眉間がひくひくと動き、涎よだれも出掛かっている。

血の匂いにやられたか。笹目はすぐ傍へ駆け寄り、声を掛けた。

「嬢、気を確かに。深呼吸を」

「……はあっ……はあ、はあ、はあ、はあっ……」

非情で慈悲を持たない。任務遂行のためなら異国の村を焼き、村ひとつを見せしめに蹂躪する。威圧の象徴、畏怖されるべき概念。

……『魔嬢』とはよく言ったものだ。

実際の『魔嬢』は、こんな光景に慣れない少女であるというのに、それでも腹心の笹目が近づくと、その少女は自分で呼吸を戻そうとしているのか、口元をふるふると動かしだ。

笹目は懷の皮袋を取り出すと、先を窄ませて、少女の口を塞いだ。皮袋に吐いた息が流れ込み、膨らむ。吐いた息がそのまま吸われていく。皮袋を膨らませ萎ませる動作を数回行くと、少女の小刻みだった呼吸は止み、遅れてげほりと咳き込んだ。

「………はあ、はあ、はあ……ッ」

「ご立派でした、紗銀嬢」

笹目が皮袋を離しても、少女は虚ろな目でまだ荒い呼吸を繰り返していた。

努めて冷静に続ける。

「嬢の鮮やかな軍捌き、格式高い威厳を、この笹目、とくと見ておりました。一連の遂行は嬢の軍統率を他国に知らしめすものであり、我國でも遍く知れ渡りましょう。士気は向上し、より一層の勢力拡大が望まれる筈です。殿下もお慶びになることでしょう」

格式高い振る舞いとは、果たして外れの集落を襲撃し、火を点け一人残らず肉塊にすることか。口調を変え、外見を塗りたくり、見せ掛けの統率者資質で、軍の人間を鼓舞することか。

しかし笹目はそれを非としなかった。仕えるべきは我が主君。是するは我が國、己が下されたのは令。是としないのは、命に背き、行動を全うしない己だ。

「御祖父様が……これを知って、喜ぶと思う」

『魔嬢』——軍の象徴として担ぎ上げられた少女・紗銀は、口元

の涎を拭い、答えた。

「私は…所詮、御祖父様の駒に過ぎないわ」
明らかなる自嘲であった。笹目は返す。

「いいえ。駒とは手中の一手を担えてこそその名称。貴女の振舞いは閃光のように真直ぐで迷いが無い。御身を常に省み総て善しとしな
いのも、貴方のその心根に拠るものです」

笹目は代々皇族に仕える家令かれいの名家に生まれた。紗銀が生を受ける十数年前から、笹目は主君が彼女であると定められていた。

「…笹目」

「帰りましょう。皆が、嬢の帰りを待ち侘びています」

直接的な主君は紗銀になるが、大元の主君は紗銀の祖父であり、
総帥である。総帥の命は、紗銀を軍の象徴として担ぎ上げること、
人の目を向けさせること——だからこそ笹目は教育係として、地帯
を恐怖で陥れる『魔嬢』を育て上げなければ不可なかつた。

「——飼ひ慣らされた『軍の専売雌狗』が、一丁前に駒気取りかア
？」

笹目が紗銀を小屋外に連れ出すと、薄汚れた白い景色の中で、粗
野な言い分を吐く者が居た。

『薄汚れた』というのは、血で赤く斑まだらに染め上がった集落を、積
雪が半ば白くしていたからだ。

笹目は声の出所を捉え、睨にらみを利かせる。くつくつと笑う声は、
小屋のすぐ脇に立っていた。

「利用価値があるとも思ってたのか？ 何にも斬れねエガキが、
テメエの股の間の血でも眺めてろ」

鴉カラスの如き黒い髪に、右目に取り付けられた眼帯が真黒く主張する。
残った左目の垂れた三白眼が一層不気味に映った。『高階』卿。笹
目と同じく、帝國軍隊第六部隊の特別側近の人間である。笹目はこ
の高階を蛇蝎だかつの如く嫌悪していた。自分と同じ黒様式の服を纏う立
場であることが許せなかつた。猊座けいざに仕える名家に生まれ、順当な
手筈でこの地位に着いた笹目と違い、高階は生も特殊で、半ば強引

にこの地位に上り詰めている。いくら建前で同じ『卿』と呼ばれる立場にあるとしても、笹目にとって高階は、下の立場に位置する賤しい身分であり、侮蔑の対象に過ぎなかった。

傍らの『黒塊』は、依然低い唸り声で咆哮を続けていた。

「……その耳障りな化物を早く鎮めろ」

血を拭い取ったばかりの得物の柄に触れつつ、笹目は悪意を持って言い渡す。返答次第では、第六皇嗣者の御前で不敬を払う『忌応体』に、刃を向けるも厭わなかった。

「はッ、馬の一匹や二匹手懷けられない奴が何言うんだよ」

答え、高階は明後日の方向を向く。笹目の言動に注視するわけでもない。代わりに『黒塊』が笹目を見下ろし、グルグルと唸っていた。高階と同じく、全身を黒く短い毛で覆い、興奮して丸く見開かれた目が二つと左右対称についている。細長い顔、咀嚼する口からは、血を垂れ流し、肉食の証である犬歯をぎらつかせていた。

細く締まった足、右往左往する長い尻尾、よく動く耳——高階は『馬』と言ったが、こんなにも血を滴らせている草食獣が居ていい筈なかった。外見は確かに馬であるものの、獣はそれより一回り大きく、筋肉が細く締まっている。そして明白に馬と違うのは、類を見ない艶を帯びた漆黒の毛並みであること、額に尖った角があること、さらに、背中に黒鷹の比ではない、巨大な翼を生やしていることだった。

『黒天馬』、外見を馬に喩えられるその獣は、総じてそう呼ばれる。天の馬、とはその麗しい見目から名づけられたものだが、希少種であることを差し置いても、出来過ぎた種名だった。実際は獯猛で、卑陋極まりない化物だと言うのに。退化し、無用の長物と成り下がった翼、気味悪いほどの純然たる黒毛、常時狂気を内に滾らせているかのような黒目——場に居るだけで不愉快になる、笹目は苦々しく思った。性質が似ているのだ。この化物は、隣に居る飼い主に。

「返答はそれだけか。化物と同じく、『忌応体』も調教と処分の行

使をすべきようだな」

物と同義に呼称し、威圧を込めて言い放った。

「『軍狗イヌの親玉』が何だつて？ ムツツリは鎖に繋がれて又けやしねエってか」

「……貴様」

下卑た擲からいに、笹目の眦まなじりが強張る。猊座げいざの傍に居ることこそが信念であり忠誠であると、骨の髄まで教え込まれた笹目にとって、『軍の狗』なる呼称は、己の生を否定されるのと同義だった。高階は鼻で笑う。

「いいぜ、斬り掛つてみるよ？ 『忌応体』に組み敷かれる野郎の面ツラがどんなモンか、その『軍で担オカザリがれた小娘』に見てもらえ」

自ら『忌応体』と呼んで憚はばらない者には、『狂い馬』との呼称が相応しかった。高階の眼帯で覆われている方の目も、青眼せいがんであれば同様に狂気を滾きらせていたに違いない。忌憚きたんすべき一つ目を、笹目は三日月のようにきつく撓しならせ見返した。その眼を突き刺せば、少しは痛みを味わわせるだろう。

「——笹目卿篤ササメキョウアツヒラ比良。収めなさい」

隻腕で柄を引き抜き呼吸と同時に、刃先を急所に突き刺さんとして——笹目は止めた。突如割り込んできた人の影に不意を突かれた。収めなさい、つまり、得物を。動揺を隠せなかった。紗銀が笹目に背を向け、手を開いて抑止していたのだ。

空洞になっている笹目の服の左袖が、はたはたと音を立てて風に煽あおられていく。

「竝ならびに高階卿喬地タカシナキョウキョウジ。退がりなさい」

先程噎むせている少女が、ずっと場に現われていた。気配が有っただろうか。笹目は記憶を辿り、結果、自分の察知能力が劣ってはいないと結論付けた。彼女は気配なく笹目の前に立って現われたわけではない。『魔嬢』と呼ばれる女低音アルトの冷えた声を聞き分け、笹目の体が本能で抑制したのだ。冷えて凍りつかせる物言いであった。第六皇嗣者あるじが配下を『卿』付けの本名で呼ぶことは早々無い。即ち、

紗銀は笹目を今『待て』と命じた。

首だけで振り返り、主である紗銀は言った。

「笹目。私ならいいわ、高階が言ったその通りなのだから」

「紗銀嬢。御体は」

「もう大丈夫よ。……高階。『黒花狼牙』はまだ気が立っている？」

高階は返事をしない。それが質問の答えだと解したのか、紗銀は臆することなく『黒塊』の化物へ近寄っていった。化物は未だグルグルと唸りを上げている。笹目を見る時と同じ、狂気を孕む黒い瞳を紗銀に向けた。笹目の顔が強張る。あろうことが、紗銀は自ずと獣の顔に触れたのだ。

「ロウ……疲れたでしょう」

喉のあたりを摩る。すると、唸っていた黒天馬はビクンと体をくねらせた。二度首を傾けたかと思っただ次には、ゴプア、と奇妙な音を立てて塊を吐き出していた。赤茶色に煤けた咀嚼後の残骸がごぼりと出てくる。先程もぎ取った少女の成れの果てか、興奮の最中引き千切った人間の一部か。細長い口の周りがぬらぬらと光った。滑りを帯びた液体は、黒毛をさらに黒く染め上げ、白牙の間を垂れ落ちた。

「喉に引っ掛かっていたのね。良かった……」

肉塊の蒸気が白く立ち上る。撥ねた血が紗銀の袴に付着した。口周りのぬかるんだ血が、手にもまとわりついた。紗銀は厭わない。寧ろ黒天馬に頬を近づけ、そっと寄り添う。化物はブルブル、と馬に程近い唸りになり、次第にその興奮も落ち着いてかのように見えた。咆哮に近い唸声を続けていたのは、肉塊が喉で痞えていたからか。劣う紗銀の行為を受け止めているのか。

「高階、どうして吐かせてあげなかったの。ずっと吼えていたのに」
黒天馬の耳裏を搔いてやりながら、紗銀が問う。間髪入れずに高階が答える。

「ガタガタうるせエよ。絡んできたソコのムツツリに言え」

笹目は見ていた。目の前で交わされる二人の会話を、傍らで待つ『黒塊』の姿を。

「分かっていたのに放っておくものではないわ。笹目を嚇^{けしか}ける必要はなかったはずよ」

「利用価値の無エヤツがぼざいてる。オマエのやれることなんぞ、^{「レクダ」}この馬の世話しかねエだろが」

「……………。そうね。本当に、そうね」

目を閉じて、紗銀は黒天馬に額を付ける。高階が明後日の方向を見つつ口に出したのは、不敬の言葉だ。だが奴の物言いがいつもの毒気を含んでいないことに、笹目は気付いた。紗銀の口許^{くちもと}が綻^{ほころ}ぶ瞬間を、目の当たりにした。

……………この情景、既視感がある。何処^{いづ}で。何時^{いつ}。

遣り取りを見ている笹目は、いつか見た光景を思い出した。

忘れる筈もない。六年も前になるか。この二人と一匹と自分が、同じように立ち会った。

あの時も、吹き荒^{すさ}ぶ雪は止んでいた。仄^ほかに降る白い水晶体だけが、血の海を少しずつ消していた。紗銀はいつでもよく笑い、高階の目は二つとも青眼であり、笹目の両腕も未だ——残っていた頃だった。

矮星の静寂 3

『忌応体』^{きおうたい}。それは、数奇な運命を辿る者らの総称なのかもしれない。なかった。

この國では、皇の人間が生まれることに、三歳差までの子供達が六歳時に適性審査を受ける。

^{おうぞく}皇族の人間の御身に何か起きた場合、処置を施せる身体を探すためだ。

^{すなわ}即ち、それが 移植をするための臓物提供者——忌み嫌われる適応の身体、『忌応体』である。

提供者は王族の緊急にいつでも対処ができるよう、城の巨大な敷地の一角に住むようになる。近辺を出ることを許されない代わりに、衣装住を与えられ、なに不自由なく暮らす。世俗から隔離され、提供となる王族の御身が崩御するまで暮らしは続き、御身の血肉になることを教育され、その日を待っているのだ。

身を捧げる皇族と面会することは適わない。ましてや、傍で仕えるなど生涯叶わない。

——それが何故、最も近い場所に居るのか。

「笹目^{ササメ}、やめてえつ！」

『忌応体』の目を尖剣^{レイピア}で突こうとした笹目の前に、諸手^{もて}を広げ制止した者が居た。

あどけない、十二になったばかりの少女。今にも泣き出しそうな顔で、懸命に手を広げている。

たった一匹を拘束するために作られた厩^{うまじ}は、獣の匂いに満ちていた。肉食獣の卑^{いや}しい唸り声が聞こえてくる。賢^{さか}しい生き物は、得物^{えもの}を抜く人間を外敵と見做^{みな}すらしい。恐らくは、厩を包囲している外

の軍勢に反応しているのだろう——笹目の一言があれば、彼らはいつでも既に進撃できた。

十離れた主君である少女を前に、筆頭側近である笹目は沈着として言い払った。

「不可いけませんね。紗銀嬢サギン、こんなことをしては」

『忌応体』と黒天馬の前に立つ紗銀が、びくりと震える。

昨夜に降った雪のせいで、屋敷の庭に拵しつひえた広大な庭園は、藪椿やぶつばきと牡丹ぼたんの花のみを残して、一面白く染まっていた。芝生の緑も覆われ、池泉に掛かる橋にも雪が積もっている。

この埋め尽くす雪の所為せいで、第六皇嗣者である紗銀の足跡は消され発見が遅れた。有ろう事か、接触することのない『忌応体』管理敷地内に踏み入っていたのだ。

笹目は見た。敷地内の嚴重な作りの厩。声のする方を覗いて見れば、幼い少女が鎖で雁字搦がんじがらめにされた黒天馬の顎あぎとを擦っていた。ブルル、とその見目麗しい漆黒の馬は、両目を塞がれているにも関わらず、心地良く鼻を鳴らす。やや離れた箇所で、その様子を年上の少年が見ている。気怠けだるそうにながらも、目を細めて、見守っているように。

壊しては不可いけないと感じる程の、静謐せいひつで安穩とした空気だった。

少女がこの國の第六皇嗣者でなければ。馬が漆黒の翼を持つ肉食獣でなければ。『少年』が、少女に献上する臓器を持つ『忌応体』でなければ。

鳥肌が全身で立つのと同時に、覚醒した笹目は抜刀する。優美にして辛辣しんらつ、繊細にして豪胆。殺傷力が低いとされる尖剣を、笹目は自軍に『怒れる尖右せんう』と呼称されるまでに使い熟こなしていた。斬り込みの迅はやさ。急所を一動作で貫ける的確さ。何度も突き刺す非情さ。周囲にも畏怖され、敵を殲滅、圧倒してきたのは、笹目の血筋と類稀なる天武の才に他ならない。

抜刀から相手の体を貫くまで三呼吸も必要としないはずだった。場面を見つけて声を掛けるよりも早く、叫ぶでもなく、諭すでもな

く、笹目は 有無を言わず尖剣で『忌応体』の頭蓋裏まで貫こうとしていた。

だが、先程の 立ちはだかる紗銀の一言で、動きを止めたのだ。

「ちがうの、笹目……喬地キョウジはなにも悪くない……っ！」

「何が違うと言うのですか？ 『忌応体』が國の崇高人あがめひとである第六

皇嗣者を、野蛮な肉食獣の厩に監禁した。不可侵ふかしんを犯した存在は、奇禍きかとして処断されるだけのことです」

紗銀の背後に潜む『忌応体』は、衣食住を保障されているはずが、何故か暮露服ぼろふくで、前髪も目が掛かる程に伸び切っていた。未だ主としての命を発令できない年の主をじつと捉えながら、笹目は敢あえて淡々と話す。

「……貴女は知らなければなりません。まず十人はこの城を追われ働く事も出来なくなるでしょう。部屋付数人と……忌応体管理の数人と」

抜いた尖剣を眼前に構え直した。紗銀が庇りつう存在、『忌応体』の様子は窺い知る事が出来ない。この状況で、慄然りっぜんとしているのか、或いは諦観しているのかさえも。

昨夜から居なくなったのは、何処で、誰と、何を、していたからなのか——いや、如何して 斬られようとしている存在モノをこんなにも必死に庇っているのか——その理由が、紗銀の背後に潜んでいた。「手足を失う者が出ます。眼を失う者が出ます。貴女の傍に居なかった罰と、その浅ましい肉食獣に遭遇させてしまった罰と……貴女に献上予定の『忌応体』を、一つ使い物にならなくさせた罰です」ならば、その理由を断ち切らねばならない。闇は、光に近付いてはならない。不可侵である絶対忠誠の主に近付く存在は、消さねばならない。笹目の定めも忠義も、行使する権限も、すべて主・紗銀に基づくものと決まっていた。

黒天馬が気性荒くグルグルと唸る。懇願する幼い主に、笹目は尖端を向けた。実際は紗銀のすぐ後ろに居る『忌応体』に向けてだが、鋭利な針先を前にして、紗銀が息を呑むのが分かった。

「ごめんなさい、笹目、もうしない、もう此処へ来たりしないから……っ」

「いいえ、貴女は何も悪くありません」

空恐ろしいまでの平坦な調子で答えていく。

「『ロウ』に会わせてって私が無理にたのんだの……だからやめて、笹目っ……！」

「いいえ。今も、この先も、貴女の所為には何一つならない。責を負うべきは他に居ます」

主である紗銀は傷付けずに、背後の『忌応体』を狙い突き刺す。自負があった。狭い厩中で辣腕を振るえるのは、笹目自身だけだと。「そして——私はそれを糾していく」

先を綴り、紗銀の肩を引き寄せ、剣を突き上げたは一時。煩瑣な動作は笹目の目論見通りに、主を傷付けず背後の存在のみを突き刺した。ロウ——喬地——おねがい笹目、この子をころさないでころさないで——名を外された存在が、固有名詞で呼ばれていた。紗銀の悲痛な叫びが反響する。どす黒い肉食獣は血の匂いに猛ったのか劈くように嘶いた。

厩に残り響く不協和音を掻き消したのは、異変を感じて突入した軍勢だった。

部下の一人が笹目の名を呼ぶ。近寄ろうとして、中の光景に愕然とした。

笹目の剣は、確かに真正面で『忌み嫌われる適合の体』を貫いていた。あらゆる動物が絶叫し悶絶する急所、即ち 目を刺しており、声の有らん限りの叫喚を耳にしても奇怪しくなかった。

——が。紗銀の背後で蠢いていた『忌応体』は、右目に剣先をめり込ませたまま、不敵に笑ったのだ。

「はッ……ガタガタ抜かすんじゃないやねエよ、命令なしに動けねエ狗が」
怯んだのは笹目の方だ。『忌応体』の左手が笹目の尖剣を握り締めていた。目玉を貫かれたというのに、何故喚かない？何故笑える？剣を素手で掴める？——『忌応体』如きが、こんな年端もいか

ない子供が！ 軽捷に剣を引き抜き、皮膚を切り裂いた。掴まれていた左手を裂いたのだ。付着した血の泥濘ぬかるみを払うことなく、笹目は直ぐ様二撃目を突く。しかし、紗銀の首元が締め上げられているのを目の当たりにし、手元は狂い、『忌応体』の頬を掠めるだけに終わった。

「紗銀嬢！」

『忌応体』が紗銀の首元を右肘で固めていた。喉元を締め付けられ、首を締め上げられ、紗銀が小さく咳せく。これでは人質を捕られたと同義だ。笹目は思い掛けない事態に主の名を呼び、冷静さを失い掛けた。

この機を狙っていたのかも知れない。笹目が自若じじやくを取り戻し、体勢を整え、三撃目を突くまでの間に、『忌応体』は次なる行動を起こしていた。

「約束、覚えてんだろ？ “狂え——片っ端から潰してみせろ”」

それは、『誰』に向けて話していたことだったのか。

「……自分の目玉を喰わせれば、コイツは言うことを聞くんだってな……！」

あろうことが、突き刺された後の左目に指を捻じ込み、眼球を刮くり貫いたのだ。

「莫迦なことを……迷信だ！」

笹目は我が目を疑った。狂っている。血迷っても出来る筈がない、自分の血を覚えさせる為に、肉食獣に目玉を食わせるなど！動かずに笹目の剣で目を突き刺されていたのは、感覚を麻痺させるためか。底う紗銀の背後で大人しくしていたのは、一度人質ひとたひにしてしまえば、こちらの動きをすべて封じられるからか。だが、『何の為に』？ 奴はどうして『笑っている』？ 肉食獣の馬が隣に居るというのに——『笑えている』？

警鐘が鳴り響いたが遅かった。

袂えくられ、伽藍堂がらんどうになった場所。赤や黄色の細糸が飛び出て赤く染まる箇所。尖剣で引き裂かれた掌てのひらはぼたぼたと鮮血が溢れ出ている。

まだ球体と絡み合っている繊維を乱雑に耄（むし）り取り、その場に殴り捨てる。一つの球体になった眼球を――迷わず黒天馬の口に押し込むと、『忌応体』は声を荒げた。

「お前らに囲われてる俺じゃねエ。クソ喰らえだ、全員こいつにやられて――死ね！」

契機、黒天馬は隻眼の『忌応体』の怒りを膺（トレス）写したかのように、一際高く雄叫びを上げた。

緊縛していた鎖が縄の如く引き千切られるのに時間は掛からなかった。禍々（まがまが）しい大翼がばさりと開く。豪壮な体軀が鉄柵を軽々しく飛び越えた。解き放たれた歓喜からか、暴威（ほうい）をふるう前の雄叫びか――化物染みた咆哮（ほうこう）を一頻（ひとしき）り轟かせた。

「化物が……っ！」

狂気を孕む黒い瞳と、笹目の目が合った瞬間。肉食獣は強靱な体軀に似合わぬ犀利（さいり）な判断と敏捷さで、対象を定めた。笹目はその化物の目を同じように貫こうと、尖剣（よたひ）を四度振るう。が、肉食獣が先に獲物の急襲に成功した――歯牙を突き立てていたのは、笹目の右腕だった。

手の形を残したまま、腕が宙に放り投げられる。自分の体から離れた腕の先を、笹目は初めて見ることになった。一瞬にして、右肩から下に掛けての部分が噛み千切られた。どさりと投げ捨てられ、あれが自分の腕だと認識した途端、笹目は声にならない苦悶（くもん）を上げた。

「――！！」

それは、笹目の絶叫か、怒れる肉食獣の呻（たげ）りか、気迫に騒然とした部下らの阿鼻（あび）叫喚か。

黒天馬は、厩内外を固めている笹目の部下らに驚進（はくしん）を続けた。咆哮を続ける肉食獣の覇気と場の凄惨さに、部下らは慄（おの）く。臆（おく）して逃げ出すよりも、黒天馬が軍勢に襲い掛かる方が早かった。部下ひとりの首を潰すか如く噛み付き、半分以上を食い千切って放り投げた。額の角で二、三人まとめて刺し通し、蹄（ひづめ）で五六人を薙（な）ぎ倒した。応

戦しようと刀剣を取り出す者の首をもぎ、斬ろうとする者の頭は突き刺し、逃げようとする者の体を押し潰し、暴戾^{ほうれい}、惨憺^{さんたん}たる光景、厩は見る見る間にどす黒い血で染まった。

笹目は体の血を一気に失い、意識が混濁していくのを感じた。

膝が折れる。左手の尖剣がすり抜けていった。呼吸が荒くなる。

有り得ぬ痛みを受けると、痛覚が消えると聞いたことがあった。脳裏の片隅で、『忌応体』が自ら眼球を刳り貫けたのは、これと同じ状態だったからだろうか——そう思案する。此处で意識が途絶えることだけは避けたかった。部下がたった一匹の馬と『忌応体』に蹂躪され、厩が血の海になっていく様を目に残したくはなかった。笹目は自らの主を探す。紗銀は無事なのか。朦朧とする中で、笹目は一人の幼い少女の姿を探し出した。少女は、笹目の主は、血塗れの少年の腕の中で、泣きながら此方と呼んでいた。

「笹目……笹目、いや、いや、いやああああっ……！」

視界が滲み、歪んで行く。主である紗銀の叫び声を再び聞きながら、笹目は崩れ落ちた。

大歓声を聞いて、笹目は白昼夢から目醒めた。
バルコニー

露台に立つ自分。見渡してみれば、軍の部下が大勢で屋敷を取り囲み、久稔嬢^{ひさねじょう}、第六皇嗣様、などと湧き立っている。隣国遠征と言う名の奇襲殲滅遂行から戻った笹目は、自軍を鼓舞するために紗銀を露台に立たせていた。隣には紗銀が袴の格好で、右手を大きく挙げ、強い眦^{まなじり}で階下の群集を見渡している。

力強い意志を思わせる立ち居振る舞いは、隣国に『魔嬢』と通り名を付けられる程の威厳を持った。『駒』などと本人が気にしており、他の皇嗣者らが『軍の象徴』と軽んじるように、総帥の祖父から与えられた存在意義は、隣国を畏怖する偶像に過ぎなかった。

今はその名に貶められていても構わない、と笹目は思う。間も無

く『魔嬢』の名は遍く大陸に知れ渡る。他の皇嗣者らは、せいぜい六の順序が伸し上がって權威に座すのを、齒軋りしながら見ているがいい。主の成長を追いながら、笹目はこの少女を『駒』で終わらせまいと誓った。そして、それが出来るのは自分だけだと信じて疑わなかった。

穢れるのは、自分の手だけで良い。血に染まるのは、総ての憎悪を引き受けるのは、自分だけで良い。それは、忠節と矜持でもある。役職だけではなく——自身が立てた、たった一つの誓約として。

「笹目卿——！ 高階卿——！」

特別側近二人の名を呼ぶ声もちらほらと聞こえる。同列で呼ばれ、笹目の眉間に皺が寄った。

紗銀と笹目よりもやや離れた箇所、怫然とした態度を取る隻眼の男。紗銀が諭して露台に立たせたが、階下の呼び声にも応えず、腕組みをして立っている。『忌応体』が、『卿』を付けられ自分と同じ立場で呼ばれている——笹目は『それ』と同じ扱いをされる行為が堪らなかった。

六年前、『忌応体』は 特別厩舎に緊縛されている黒天馬を放ち、皇嗣者を人質に、軍の大勢の人間を噛み殺させた。意識を取り戻した笹目は、総帥がその危険物を紗銀の元に置いて、黒天馬ごと軍用に使うという決定を聞いた。希少種で懐かないとされた黒天馬が、『忌応体』の命だけ聞いたことに目を付けたのだ。黒天馬が命を聞けば、軍力は増大する。紗銀を『軍の象徴』に育て上げ、万が一紗銀が負傷しても『忌応体』が傍に居れば換えが利く——決定の前に部下が大勢斃り殺されたという事実が消された。

『忌応体』には元の名が戻され、軍に入隊するや否や、みるみる頭角を現していった。『狂い馬』と畏怖されるようになり、紗銀の右には笹目が、左には『忌応体』の高階が傍に付くのにそう時間はかからなかった。

皇族の人間専用の臍物提供として、献上される適応の体。忌み嫌われる適応。

身を捧げる猊座と面会することも能わず、傍で仕えるなど生涯叶わない存在が——何故、紗銀に最も近い場所に居るのか。

忌々しく思った途端、右腕が疼いた。食い千切られ、肩から下は全て失った箇所だ。化膿は落ち着き、腐らずに済んだ筈であるのに「笹目。貴方も、皆に手を振ってあげて」

隣に居ながらも佇むだけに留めていた笹目を、紗銀が声を掛けた。あくまでも場の中心は紗銀である。離れた箇所で剥れ、階下に応えない高階と違い、傍で身を護る役目の笹目は、丁重に断った。

「いえ、私は。嬢がお応えすれば、皆の士気も上がります」

「笹目はいつもそれね。高階があつた調子なのは諦めているけれど——笹目ぐらい、もう少し付き合ってくれてもいいと思うわ」

「……善処します」

「いやだ、責めているわけではないのに」

紗銀は軽く笑う。垣間見せた優しい表情と、部屋付の者にさせた際どい化粧とが、適わなかった。

いつからこんな赤々とした紅を差すようになったのか。優しい心根を覆い被さなくてはならなくなったのか。外では非情な『魔嬢』としての通り名を持ち、内にも『軍の統率者』としての顔しか見せず、恐らく心情をすべて打ち明ける者など、無に等しいというのに。余程難しい顔をしていたのだろうか。歓声が止まない中、紗銀はそつと笹目の右肩に触った。疾うに失われた腕だ。先程まであった疼きが、ふと消えた気がした。

「——私は、貴方のために何かできたかしら」

ぽつりと呟いた言葉を、特別側近の笹目は聞き逃さなかった。

「紗銀嬢？」

「何でもないわ。ねえ笹目。『駒の鳥』は——まだ打ち落とされるわけにはいかないものね」

笹目を見上げる。隣国の『殲滅』遂行したばかりで参っているだろうに、紗銀は笹目の目を確り見据えて、訊いた。

「一緒に来てくれる？ 最後まで」

蝟集^{いしゅう}した軍の歡呼^{かんぷ}の聲が、訝^{いしたま}する。

笹目は瞠^{とろこ}若^{やく}した。未だ幼い少女の姿を、今の紗銀と重ねて見ていたのだと自覺した。杞憂^{きゆう}に過ぎない。もう目の前の主は、純真な殻を脱ぎ棄て、躍進^{えつしん}すべく、常に前を向いている。駒だけで終わらせたくないという、強い意志を感じる。躍進^{えつしん}を見届けたいと願った。

否、既に誓っていた筈だ——忠誠と誇りに掛けて、我が主を護ると。主の微笑を、笹目は自信に満ちたものと受け取った。仰せのままに、と力強く答えた。

「貴女の道は、この笹目の道です」

冷たい冷気が肌を刺す。この國にも、また冬が訪れようとしていた。

矮星の静寂 3（後書き）

後1～2話で『矮星の静寂』篇、完結です。
早く投稿できるよう頑張ります……！；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4710b/>

ふゆそら

2010年12月18日02時37分発行